

南国市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

土佐国分寺跡

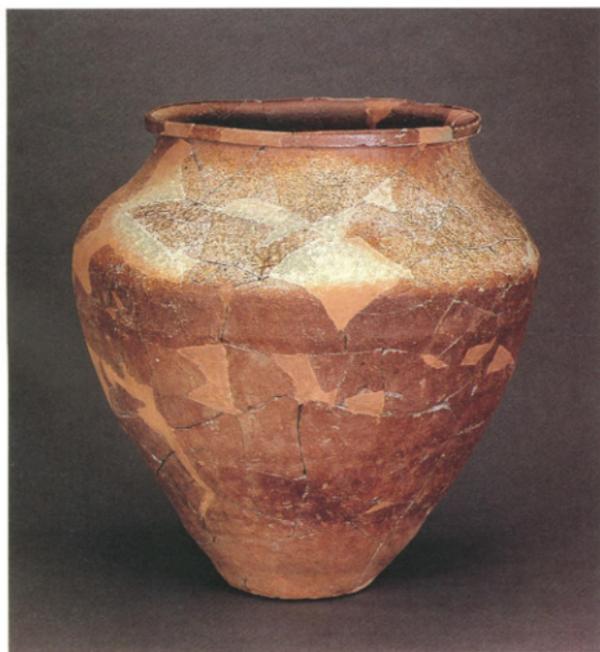
—第4次発掘調査報告書—

2009年3月

高知県南国市教育委員会



A-6区出土 海欒葡萄甕



A-6区出土 常滑甕

序

土佐国分寺跡は、高知県における古代の歴史を語る上では欠くことのできない重要な遺跡として国の史跡指定を受けており、その保存が行われてきました。そして、現在も四国八十八ヶ所第二十九番札所として多くの参拝者が訪れており、四季折々の姿を見せています。

現在の本堂は長宗我部元親により永禄元年（1558）に再建されたものであり、建造物として国の重要文化財の指定を受けています。また、国指定有形文化財として平安時代と鎌倉時代にさかのぼる2体の薬師如来像と県内最古の梵鐘が寺宝として伝えられており、県内随一の古刹を誇っています。史跡としては土塁や客殿の庭石となっている塔心礎などから当時の土佐国分僧寺の姿を思い描くこともできますが、礎石などは残されておらず、これまでも寺域や伽藍配置の確認のために何度かの発掘調査が行われてきました。

今回は現国分寺のご理解により、国、県の協力を得て第4次の確認調査を行うことができました。今次の調査では、これまでの調査でも不明であった金堂跡の確認を中心に伽藍配置の解明を大きな目的として進められ、現本堂周辺の調査区から掘込み地業による基壇跡と考えられる遺構を確認することができ、金堂跡解明の重要な資料を得ることができました。今回の発見は土佐国分寺跡の当時の姿を知るための大きな前進となりましたが、全体の伽藍配置に関しては、塔跡や回廊、南大門、僧坊など個々の様相が未だ不明な点も多く、さらなる調査研究が必要とされています。

また、史跡土佐国分寺跡としての今後の保存整備を考える上でも、今次調査の資料を基に検討を行わなければなりません。このような点からも、今回の報告書が土佐国分寺跡の研究に活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたって全面的なご協力を頂いた土佐国分寺並びに地元国分地区の皆様にご御礼申し上げますとともに、関係各位に対し記して感謝いたします。

平成21年3月

南国市教育委員会
教育長 大野 吉彦

例 言

- 1 本書は、南国市が平成5年度に国庫補助事業として実施した国史跡土佐国分寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 土佐国分寺跡における国庫補助確認調査はこれまでに第3次調査まで行われており、今次調査は第4次調査として実施された。
- 3 発掘調査は、国史跡土佐国分寺跡の伽藍配置及び遺構等の遺存状態を確認することを目的として、南国市教育委員会が調査主体となり、平成5年6月1日から12月20日の間に各調査区の調査を随時行った。
- 4 調査区は、過去に行われた確認調査等の成果を基にA～F区の各調査区の21箇所トレンチにより行われ、調査面積の合計は189.6㎡であった。
- 5 発掘調査にあたっては、高知県教育委員会及び助高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導、協力を得て、調査担当者は山本哲也（平成5年度助高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第1係長）、があたり、池澤俊幸（平成5年度助高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員）の協力を得た。調査事務は岡崎聡一（平成5年度南国市教育委員会社会教育課主幹）が担当した。
- 6 報告書の作成は森田尚宏（助高知県文化財団埋蔵文化財センター次長）が行い、南国市教育委員会が刊行した。報告書刊行の事務は坂本裕一（南国市教育委員会生涯学習課）が行った。
- 7 報告書は調査担当者である山本が作成した資料を基とし、事実報告を中心として作成した。また、調査トレンチ、遺構写真は山本撮影の写真を使用し、遺物写真は森田が撮影した。巻頭カラーの常滑甕の写真は高知県立歴史民俗博物館から提供を受けることができた。記して感謝いたします。
- 8 発掘調査に際しては、宗教法人国分寺の林廣裕長老及び林隆光住職をはじめとする関係者の方々、そして地元国分地区の皆様にも多大なご援助、ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。
- 9 調査略号は93-14KBであり、遺物の注記もこれによった。また、出土遺物は南国市教育委員会において保管している。

本文目次

I	土佐国分寺跡の位置と環境	
1	位置と地理的環境	1
2	歴史的環境	3
II	調査に至る経緯と経過	
1	土佐国分寺跡の沿革	7
2	土佐国分寺跡のこれまでの調査	10
III	第4次調査の内容	
1	調査の方法	17
2	A～F区の調査	19
IV	遺構と遺物	
1	遺 構	32
2	遺 物	33
V	まとめ	
1	寺 域	42
2	伽藍配置	43

卷頭図版

A-6区出土 海獣葡萄鏡・常滑甕

挿図目次

第1図	南国市位置図	1
第2図	土佐国分寺跡位置図 (S=1/50,000)	2
第3図	土佐国分寺跡周辺遺跡図 (S=1/25,000)	4
第4図	土佐国分寺跡周辺地形図 (S=1/10,000)	6
第5図	国分寺境内平面図〔大正10年8月実測〕 (S=1/1,200)	8
第6図	土佐国分寺跡現状図 (S=1/1,200)	9
第7図	土佐国分寺跡全体調査区設定図 (S=1/1,200)	16
第8図	土佐国分寺跡第4次調査区設定図 (S=1/1,000)	18
第9図	A-1~3区平面図・セクション図 (S=1/80)	20
第10図	A-4・6・7区平面図・断面図・セクション図 (S=1/80)	22
第11図	A-8、B-1~4区平面図・セクション図 (S=1/80)	25
第12図	B-5・6、C-1・2、D-1区平面図・セクション図 (S=1/80)	27
第13図	E-1・2区平面図・セクション図 (S=1/100)	29
第14図	F-1・2区平面図・セクション図 (S=1/80)	31
第15図	出土遺物1 (A-1~4・6区出土土器)	37
第16図	出土遺物2 (A-6・8、B-1・2・5、C-2、D-1、E、F区出土土器)	38
第17図	出土遺物3 (A-1区出土瓦)	39
第18図	出土遺物4 (A-1・2区出土瓦)	40
第19図	出土遺物5 (A-4、B-3区出土瓦)	41

表目次

第1表	土佐国分寺跡周辺遺跡表	5
第2表	土佐国分寺跡調査一覧表	15
第3表	出土遺物法量表1~2	35

写真図版目次

PL1	1	土佐国分寺跡航空写真	2	土佐国分寺跡遠景 (国分川から)
PL2	1	土佐国分寺本堂・参道	2	土佐国分寺仁王門
PL3	1	土佐国分寺東側土塁	2	土佐国分寺南側土塁跡
PL4	1	A区調査対象地 (西から)	2	A-1区 (西から)
PL5	1	A-1区集石 (東から)	2	A-1区集石 (北から)
PL6	1	A-3区南部 (北から)	2	A-3区南部集石 (南から)
PL7	1	A-3区南部集石 (北から)	2	A-3区東部集石 (東から)
PL8	1	A-3区東部集石 (南から)	2	A-4区 (西から)
PL9	1	A-5区 (南から)	2	A-6区 (南から)
PL10	1	A-6区 (北から)	2	A-6区集石 (西から)
PL11	1	A-7区 (東から)	2	A-7区 (北から)
PL12	1	B-1区 (東から)	2	B-1区 (南から)
PL13	1	B-2区 (東から)	2	B-2区 (北から)
PL14	1	B-2区西壁	2	B-2区北壁
PL15	1	B-3区 (南から)	2	B-3区 (東から)
PL16	1	B-4区 (北から)	2	B-5区 (西から)
PL17	1	B-5区 (西から)	2	B-5区 (東から)
PL18	1	B-6区 (西から)	2	B-6区 (東から)
PL19	1	C-1区 (西から)	2	C-2区 (西から)
PL20	1	C-2区 (南から)	2	D-1区 (南から)
PL21	1	E区 (南から)	2	E-1区 (北から)
PL22	1	E-1区石列 (東から)	2	E-2区 (北から)
PL23	1	F区 (南から)	2	F区 (西から)
PL24	1	F-1区 (北から)	2	F-1区 (南から)
PL25	1	F-2区 (南から)	2	F-2区 (西から)
PL26	1	A-1・2・3区出土遺物 (内面)	2	A-1・2・3区出土遺物 (外面)
PL27	1	A-3・4・6・8区出土遺物 (内面)	2	A-3・4・6・8区出土遺物 (外面)
PL28	1	A-6区出土 海獣葡萄鏡	2	A-6区出土 常滑甕
PL29	1	A-8、B-1・2区出土遺物 (内面)	2	A-8、B-1・2区出土遺物 (外面)
PL30	1	B-2・5、C-2、D-1、E、F区出土遺物 (内面)		
	2	B-2・5、C-2、D-1、E、F区出土遺物 (外面)		
PL31	1	A-1区出土瓦		
PL32	1	A-1・2区出土瓦		
PL33	1	A-4、B-3区出土瓦		

I 土佐国分寺跡の位置と環境

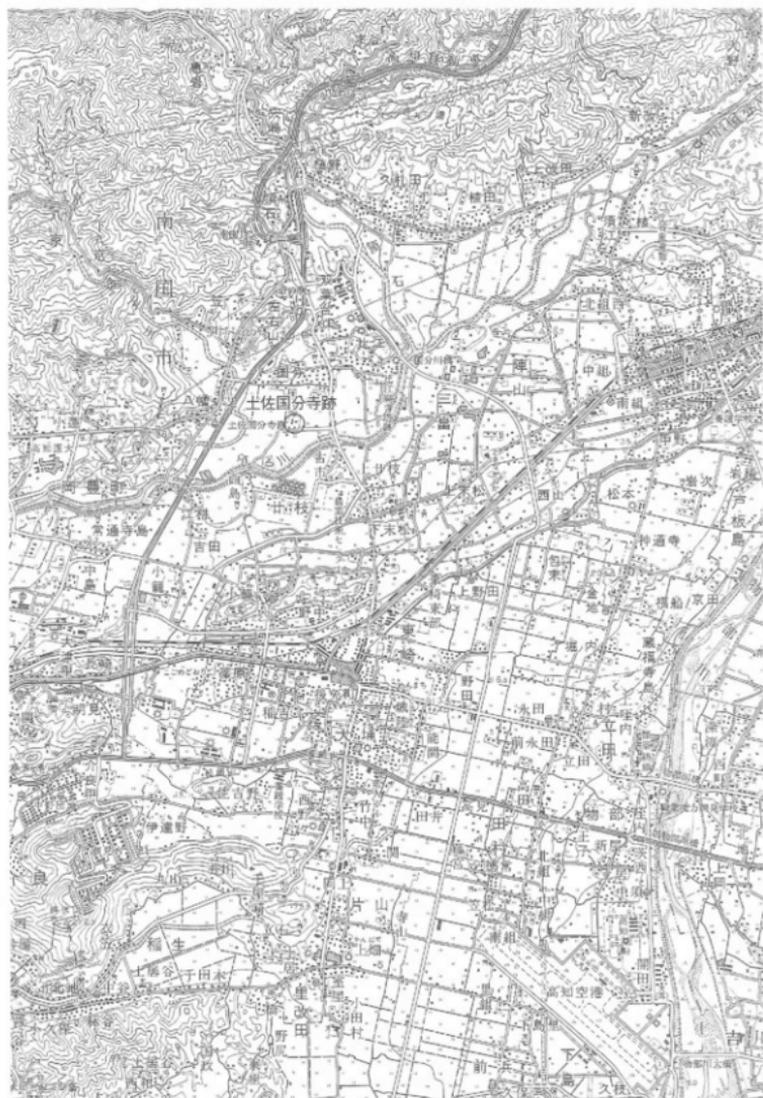
1 位置と地理的環境

土佐国分寺跡は高知県の中央部、高知平野の北部に位置しており、南国市国分546番地外に所在している。周辺には水田が広がり南には清流国分川が流れる自然豊かな中に現土佐国分寺の森を見ることが出来る。南国市の平野部は物部川により形成された南部一帯と国分川流域となる北部よりなっており、土佐山田から延びる長岡台地を境としている。物部川流域である南部は香美市から南国市にかけて大きく広がる県内でも最大の平野部であり、また、右岸の香南市域においても野市台地等の平野が広がっており、数多くの遺跡が所在している。これに対し国分川は香美市土佐山田町新改から南国市を通過して高知市へと西流し、浦戸湾へ流入しているが流域面積は狭く、形成される平野部も物部川流域に比べればそれほど広くない。しかし、国分川流域には土佐国分寺跡をはじめとし、土佐国衙跡、比江尻寺跡など重要な遺跡が所在しており、香美市から南国市にかけての山麓部には古墳や窯跡なども集中的に形成されており、古代以降、重要な地域として認識されていたようである。

土佐国分寺跡は東西に流れる国分川中流の北岸約200m、標高約13mの沖積面に位置しており、さらに北側約300mでは周辺の水田面からの比高約2mの段丘面が形成されている。地形的には国分川により形成された扇状地であり、上流側約1.5kmの地点では北側の山麓から流出する領石川が合流し、下流側約1.2kmではやはり北から流出する支流の笠ノ川と合流し、これより南東の下流域は湿地帯となり浦戸湾周辺デルタ地帯へとつながっている。



第1図 南国市位置図



第2図 土佐国分寺跡位置図 (S=1/50,000)

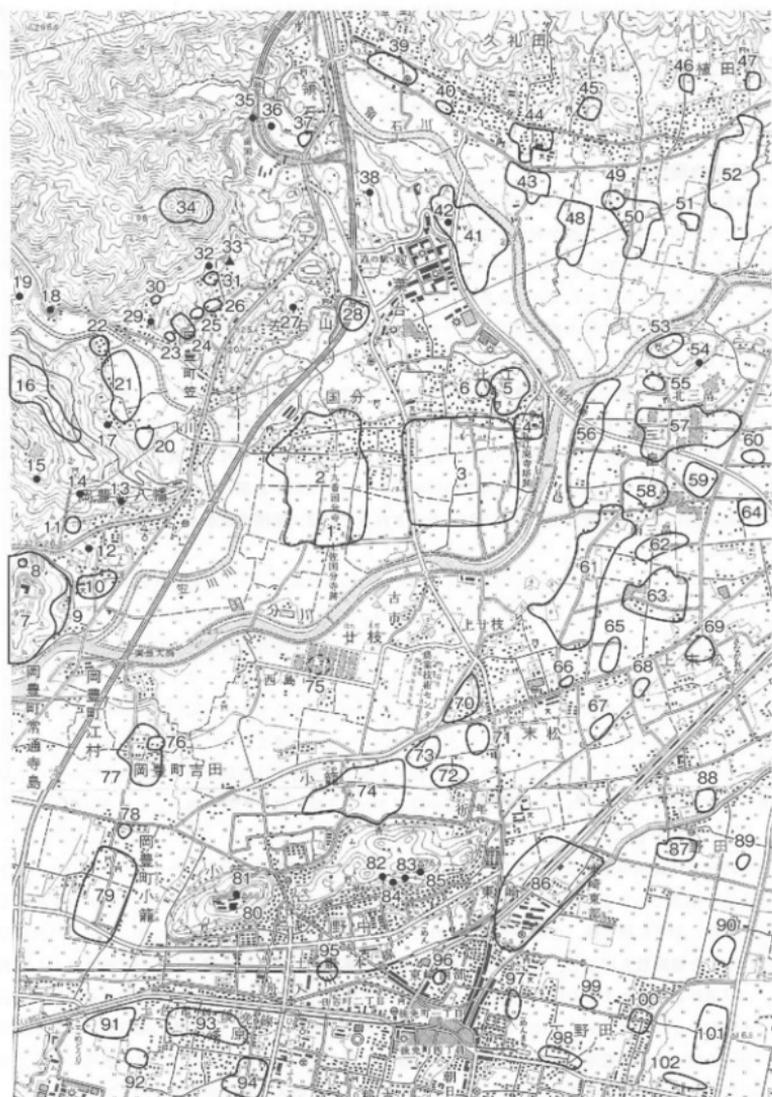
地質的には、国分川の河川堆積による砂礫層及び黄褐色粘土層が基盤層となっており、その上に茶褐色土等の堆積土とともに黒ボク土の堆積が部分的に見られる。北側の段丘面上には段丘礫層上にアカホヤ火山灰を起源とする黒ボク土が全面的に堆積しており、土佐国分寺跡に見られる黒ボク土も同起源の土壌と見られ、段丘面上からの流れ込みによる堆積の可能性も考えられる。

2 歴史的環境

高知県内における遺跡の分布は高知県中央部に集中しており、県内遺跡の内約7割が所在している。その中でも土佐国分寺跡が所在する南国市は高知県内でも最も遺跡の分布が多く、現在のところ約290ヶ所の遺跡が確認されている。高知県中央部における遺跡の分布範囲は南国市と香美市土佐山田町に広がる物部川及び国分川により形成された平野部に集中しており、山麓部には古墳も集中的に所在している。また、物部川左岸の香南市野市町や香我美町にも多数の遺跡の所在が知られており、高知県の歴史を語る上では欠くことのできない中心地域である。主要な遺跡の分布においても、弥生時代における県内最大の拠点集落である田村遺跡群が市域南部に位置し、古墳時代後期になると横穴式石室の古墳が北部山麓に集中して形成される。古代では土佐一国の中心として国府や国分寺が市域北部に設置され、中世では再び市域の南部に守護代細川氏の居館である田村城館が築造される。戦国時代には土佐一国を平定し、四国朝綱を成し遂げた長宗我部氏の居城である岡豊城跡が北部の岡豊山に所在するなど、近世、山内氏の入国により高知城及びその城下町が形成されるまでは、南国市域が土佐の歴史の中心地であったと言える。

南国市を中心とする高知平野における遺跡を時代別に追ってみると、旧石器時代から近世に至る各時代の代表的な遺跡を見ることができる。旧石器時代の遺跡は県内では非常に少数であるが、その中で旧石器時代を代表する遺跡と言えるのが奥谷南遺跡である。奥谷南遺跡は南国市北部、岡豊町の山麓部に位置し、高速道路建設により調査された岩陰遺跡であるが、調査の結果、ナイフ形石器と細石刃、細石刃石核が層序をなして出土しており、量的にもこれまでの遺物量を大きく上回り、高知県における旧石器時代の様相を知る上で極めて重要な資料となっている。また、縄文時代においても草創期、前期、後期を中心とした遺物が出土しており、さらに近接する栄エ田遺跡では貯蔵穴等も検出されている。市域南部の田村遺跡群では縄文時代後期の包含層が確認され、土坑や焼土、炭化物とともに多量の土器と石鏝、打製石斧等がまとまって出土している。

弥生時代では高知空港拡張整備事業に伴い田村遺跡群の発掘調査が2度にわたり行われており、県下最大の弥生集落であることが判明している。調査では前期初頭から後期中葉にかけての400棟を越える竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等が検出されており、集落の変遷を知ることができる。弥生時代前期後半になると遺跡数も増加し、大篠小学校遺跡、岩村遺跡群等が見られるが、中期の遺跡は減少しており、再び遺跡数が増加するのは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてである。田村遺跡群の最盛期は後期前半から中葉であるが後半になると廃絶し、高知平野の各所に一定規模の拠点的な集落が出現し、南国市域では東崎遺跡、小龍遺跡、岩村遺跡群などがあげられる。古墳時代では山麓部に多くの横穴式石室を持つ古墳が築造されており、中でも小蓮古墳は県下最大の横穴式石室を有している。また、舟岩古墳群では20数基の群集墳が形成され、古墳時代においても南国市域に大きな勢力が存在していた



第3図 土佐国分寺跡周辺遺跡図 (S=1/25,000)

ものと考えられる。

古代においては、土佐国の中心となる土佐国府跡や土佐国分寺跡、古代寺院である比江廃寺跡等が比江・国分地区に集中しており、南部では田村遺跡群において2ヶ所のコの字形の配置を持つ建物群が検出されており、当時の荘園である田村荘関連の遺構と考えられている。また、最近の調査では西野々遺跡においても古代の独立柱建物群が発見され、官衙に係する施設の存在が推定されており、南国市域における古代に関する資料の蓄積が進められている。

中世では、室町時代における土佐の守護代である細川氏の居館とされる田村城跡や戦国時代の雄、長宗我部氏の居城である岡豊城跡が知られているが、一部の調査が行われた岩村城跡などの方形館や山城が多く存在している。また、田村遺跡群で多数検出された溝に囲まれた屋敷跡等の遺構についても各所の調査で確認されており、中世遺跡の分布が市域に広がり遺跡数も増加していることから、南国市域が当時の政治経済の中心であったことがうかがえる。

近世になると、山内氏の入国により高知城の築城と城下町の形成が行われたことにより、高知市域が土佐藩の中心となり、南国市域は農村地帯の景観を呈することとなる。発掘調査においても小規模な掘立柱建物跡やハンダ土坑等が検出されており、農村に関する遺構として考えられている。近代以降も水田の広がる農村地帯の景観が引き続き維持されているが、近年では陣山遺跡で検出された太平洋戦争時の送信所跡が戦争遺跡として調査の対象となるケースもあり、近現代遺跡として高知空港周辺に点在する海軍航空隊の掩体7基が南国市史跡として指定され、保存されている。

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	土佐国分寺跡	古代	35	口ミノツ谷古墳	古墳	69	五反地遺跡	古墳～中世
2	国分寺遺跡群	古墳～近世	36	牛月古墳	古墳	70	後藤丸遺跡	弥生～近世
3	土佐国府跡	古代	37	八反田遺跡	中世	71	辺野石南遺跡	平安～中世
4	比江廃寺跡	古代	38	堂原古墳	古墳	72	久保遺跡	古墳～近世
5	比江山城跡	中世	39	堂原敷遺跡	弥生～中世	73	二ツ丸遺跡	古墳～近世
6	乾家墓所	中世	40	東屋敷遺跡	古墳～平安	74	十島田遺跡	弥生～近世
7	岡豊城跡	中世	41	上岡郷遺跡	古代	75	廣井土居城跡	中世
8	香川五郎次郎親和の墓	中世	42	鯛ノ骨1・2号墳	古墳	76	馬背東2号墳	古墳
9	西谷遺跡	中世	43	南陽遺跡	平安～中世	77	馬背東2号墳	古墳
10	西場遺跡	中世	44	中ノ土居遺跡	中世	78	小籠土居城跡	中世
11	鹿本遺跡	古墳～平安	45	東ノ土居遺跡	古墳～中世	79	小籠遺跡	弥生～近世
12	米内古墳	古墳	46	植田土居城跡	中世	80	越戸1号墳	古墳
13	鹿本1号墳	古墳	47	寺中遺跡	古墳～平安	81	越戸2号墳	古墳
14	鹿本2号墳	古墳	48	百保田遺跡	古墳～平安	82	坂折山1・2号墳	古墳
15	狭間古墳	古墳	49	沖ノ土居城跡	中世	83	年越山1号墳	古墳
16	赤岩古墳群(1～16号)	古墳	50	泉ノ内遺跡	古墳～平安	84	年越山12号墳	古墳
17	西村古墳	古墳	51	畑ヶ田遺跡	古墳～平安	85	年越山13号墳	古墳
18	畑ヶ田古墳	古墳	52	ハザマ遺跡	古墳～平安	86	東崎遺跡	弥生～中世
19	瀬口古墳	古墳	53	三富城跡	中世	87	シロノ倉遺跡	古墳～中世
20	西久保遺跡	弥生～平安	54	三島山古墳	古墳	88	上野田土居城跡	中世
21	西村遺跡	弥生～平安	55	海神遺跡	古墳	89	大ノ口内遺跡	古墳～中世
22	西村土居城跡	中世	56	瀬ノ上遺跡	弥生～平安	90	大ノ口内遺跡	弥生～中世
23	池原古墳跡	中世	57	三島遺跡	弥生～平安	91	中兵衛遺跡	中世
24	池原遺跡	中世	58	福直遺跡	弥生～中世	92	北野奇遺跡	弥生～平安
25	西城城跡	中世	59	水山遺跡	弥生～平安	93	石宮ノ丸遺跡	弥生～中世
26	土居遺跡	中世	60	白山遺跡	古墳～平安	94	北泉遺跡	弥生～平安
27	左右山古墳	古墳	61	三浦遺跡	弥生～近世	95	野中興寺跡	平安
28	五反田ヤコツエ遺跡	古墳～中世	62	南地知遺跡	古墳	96	野中興寺跡	平安
29	寺家古墳	古墳	63	池ノ上遺跡	古墳～中世	97	西郷遺跡	古墳～平安
30	寺家遺跡	中世	64	明神遺跡	古墳～平安	98	門下遺跡	古墳～中世
31	長瀬遺跡	古墳	65	八反地遺跡	古墳～中世	99	野中遺跡	古墳～平安
32	長瀬古墳	古墳	66	中屋遺跡	古墳～中世	100	解田土居城跡	中世
33	笠ノ川遺跡	古墳	67	米屋の東遺跡	古墳～近世	101	横溝遺跡	弥生～平安
34	新城城跡	中世	68	末松遺跡	古墳～中世	102	松ヶ内遺跡	古墳～平安

第1表 土佐国分寺跡周辺遺跡表



第4图 土佐国分寺跡周辺地形图 (S=1/10,000)

II 調査に至る経緯と経過

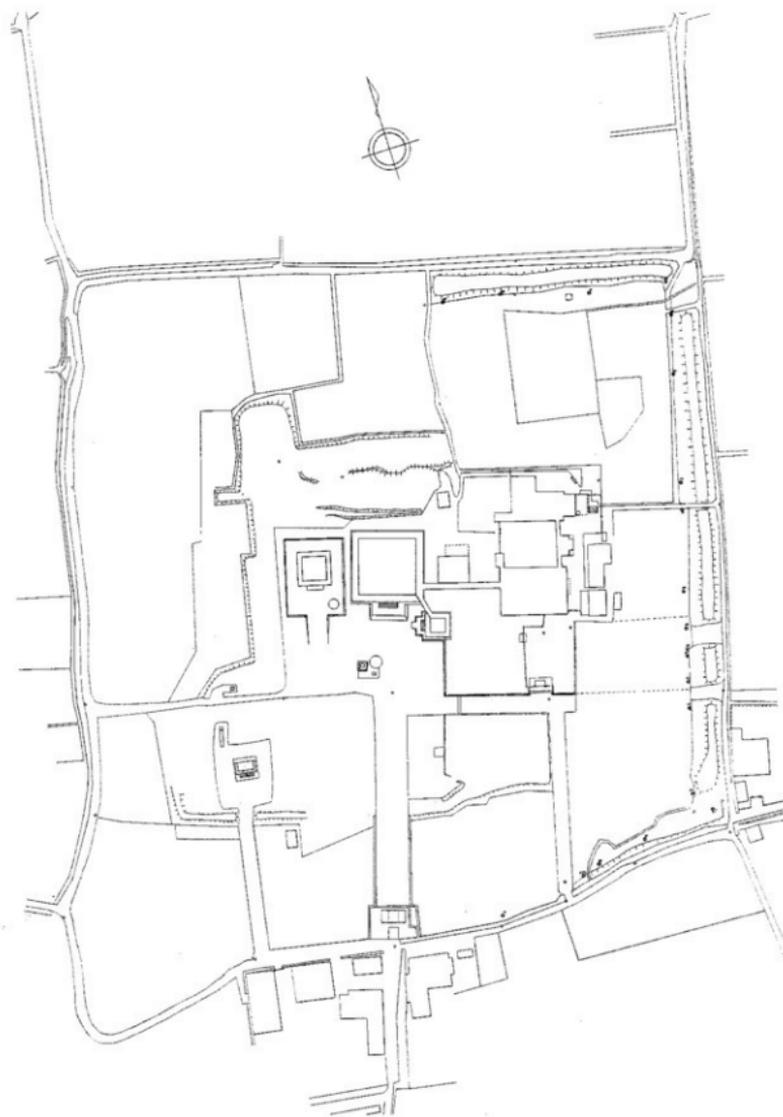
1 土佐国分寺跡の沿革

土佐国分寺跡は大正11年10月12日に国史跡として指定されており、本堂についても永禄元年(1558)に長宗我部元親により再建されたものが明治37年8月29日に特別保護建造物の指定を受け、昭和25年8月29日に国指定重要文化財(建造物)となっている。また、木造業師如来立像2体(平安時代後期作・明治44年指定、鎌倉時代作・大正2年指定)と梵鐘(平安時代前期鑄造・昭和31年指定)も重要文化財の指定を受けており、土佐における古刹として保護されてきた。

土佐国分寺跡には現在も宗教法人として真言宗智山派摩尼山宝蔵院土佐国分寺が存在しており、史跡指定地がほぼ現土佐国分寺の境内地となっている。また、四国八十八カ所の第29番札所であり、年間を通じて四国巡礼の姿が絶えることなく、多くの参拝者により賑わっている。現国分寺は寺域のほぼ中央部に本堂が所在し、本堂の南約75mに仁王門が位置する。本堂の東側には客殿、中庭が連なり、さらにその東には寺務所、庫裡、光明殿があり、客殿の北にも庫裡や倉庫などが存在する。本堂の西には大師堂が接しており、その南約25mには開山堂が存在している。また、開山堂の西15mには国分寺と一体となるように惣社も鎮座している。これらの建物等については、昭和52年の鐘樓建立及び書院の改築に始まり、翌昭和53年の庫裡の改築、それ以降も仁王門、参道、土塀、便所、光明殿建築等の現状変更に伴う確認調査が行われている。

土佐国分寺跡の中で最も明確な遺構としては、境内地の東境となる南北方向の土塁が存在する。この土塁は全長135m、幅3~4m、高さ1.5~2mの規模を持ち、北から58mの位置に幅5mの出入口が設けられており、南北に分断されているが、土佐国分寺跡の寺域の東限を示すものと考えられ、史跡指定時の根拠のひとつとなっている。また、現在では寺院境内に礎石等はほとんど残されていないが、客殿の庭園には礎石として使用されたと考えられる平石が礎石として置かれており、その中には塔芯礎も礎石として立てられている。この塔芯礎は元々境内地の南東部分の歴代住職の墓所にあり、秋葉社の土台として使われていたということから、大きく移動していなければ歴代住職墓所の位置が塔跡である可能性を示している。塔芯礎の形状は三角形を呈しており、長辺は約135cm、短辺は約113cm、最大厚約70cmである。表面には最大径約70cm、深さ6cmの円孔が柱座として穿たれており、柱座円孔から長さ10cm、幅5cm、深さ6cmの排水溝が掘られている。さらにその中心には直径約20cm、深さ約12cmの円孔が掘込まれており、形態から舍利孔ではなく心柱のほぞ孔と考えられている。

また、土佐国分寺跡の寺域については、現存する土塁等から東西500尺、南北450尺と推定されており、その伽藍配置は東大寺式と考えれば、古瓦の出土が現本堂の裏周辺に多いことから、金堂の位置は現本堂とほぼ同位置に存在していたものと考えられる。本堂西の大師堂付近に見られる古瓦は西回廊、僧舎内庭園の古瓦は東回廊、惣社の東方に散布する古瓦は中門及び南門のものと推定すれば、先の塔跡も含め東大寺式の伽藍配置が復元される。また、惣社東に土壇状の地形があり、東の塔跡(歴代住職の墓所)と対照的な位置であることから西塔跡とも考えられるが、塔芯礎や礎石は確認されていない。また、推定寺域を南北四分、東西八等分した場合、中央交点に配した金堂を中心として、すべての伽藍が中央の東西四区画内に収まるのが土佐国分寺跡のひとつの特徴とされている。



第5图 国分寺境内平面图〔大正10年8月实测〕(S=1/1,200)

2 土佐国分寺跡のこれまでの調査

土佐国分寺跡の発掘調査が最初に行われたのは1977（昭和52）年であり、以後、現状変更に伴う事前の確認調査と国庫補助事業による重要遺跡確認調査が行われている。各発掘調査については土佐国分寺跡発掘調査一覧表（第2表）にまとめているが、以下にその概要について述べる。

（1）1977（昭和52）年度調査（77KB）

1977年度の発掘調査は鐘樓の建立及び書院の建て替えに伴う現状変更の事前確認調査として行われ、土佐国分寺跡に関する最初の発掘調査であった。発掘調査は昭和52年2月4・5日に鐘樓建立地、同年5月23～28日に書院建て替えに伴い実施され、昭和53年に報告書が刊行されている。

鐘樓建立地では5.7×5.7m、約32.5㎡の調査区により発掘が行われ、地表下10cmの第2層砂利混じり粘土層中に直径約60センチの円形で浅い皿状のピット6個が検出された。ピットの底には柱穴の根石と見られる小石が敷かれており、出土遺物等から近世初頭の時期と考えられ、柱間は約1.8mである。

近世の柱穴以外にも2個の弥生時代の貯蔵穴として報告されたピットが検出されている。P1の貯蔵穴とされるピットからは弥生時代中期後半の土器が出土し、P2からは弥生土器の出土はないものと同時期として考えられ、層位的にも焼けた古瓦を多く含む第3層黒色土下の地山と考えられる第4層砂利混じり粘土層からの掘込みであることから弥生時代の所産とされたものである。その後の参道改修に伴う現状変更及び国庫補助の発掘調査によって礎石の掘込み地業のピットが発見された結果、鐘樓建立地で検出された弥生土坑もその配置から見て掘込み地業のピットの一部であることが判明し、3間×6間の東西建物跡の東南隅部の柱跡と考えられている。また、弥生土器の出土については、当該時期の遺構、遺物がその後の調査でも確認されていることから掘込み地業時における弥生土器の混入と考えられる。

解体された書院（客殿）は慶安3年（1650）の棟札をもつ近世建造物であったが、その下層からは礎石の根石が残る柱跡が検出されており、多量の炭化物とともに青磁等が出土することから、室町時代末に焼失した建造物の存在が考えられた。古代寺院に関する遺構としては5基の瓦溜めが確認されており、多量の丸瓦、平瓦とともに複弁・単弁蓮花文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が出土しており、串状の杉木に刺された富寿神宝10枚も見られている。瓦溜めの形成時期は、須恵器等の出土遺物から平安時代後期と考えられ、また、出土瓦の大半が被熱を受けており、瓦溜めの埋土中にも多量の炭化物が見られることから創建当時の伽藍も含め平安時代後期に焼失したものと考えられている。同時に土佐国分寺跡以前の遺構として、弥生時代後期末から古墳時代の堅穴住居跡2棟も検出されている。

（2）1978（昭和53）年度調査（78KB）

1977年度に引き続き老朽化していた庫裡の改築が行われ、現状変更に伴う事前確認調査として2回目の発掘調査が行われた。調査では古代寺院に関する明確な遺構は検出されなかったが、多量の古瓦と須恵器、土師器等も出土している。また、前年度の調査と同様に弥生時代後期末の土坑や柱穴が検出されており、当該時期の集落が一定範囲に広がっていることも確認された。調査区の土層から見れば近世後半から近代にかけて強く攪乱を受けたようであり、広範囲にわたり地山まで掘削されている状態であった。なお、昭和54年に刊行された報告書には国分寺の古絵図等がまとめられ、掲載されている。

(3) 1979 (昭和54) 年度調査 (79KB 79西市道)

土佐国分寺西側の南北市道の拡幅工事に伴い確認調査が行われた。調査対象地には土塁の残存等は残されていないが、これまで寺域の西限と考えられている位置であり、寺域を画する遺構の検出が期待された。調査は南からA・B・C地区に対しTR-1～TR-6の6個のトレンチにより行われ、地表下50～80cmにおいて黒色混砂土による版築状の堆積土が地山上に確認されている。また、20～30cmの礫による集石等も検出されたことから、現市道部分を中心に土塁と考えられる遺構の基底部分が残存しているとも考えられたが、集石中からは古瓦とともに中世陶磁器片も出土していることから、土塁が存在していたとしても中世段階の可能性が強く、創建時の土塁の存在についてはさらに検討が必要である。

(4) 1983 (昭和58) 年度調査 (83KB 83書庫)

庫裡西側の書庫の老朽化による建て替えに伴う事前の確認調査が行われた。調査の結果、溝跡、土坑等が検出されたが、いずれも時期的には近世であり、古代寺院に関する遺構は検出されなかった。また、遺構は検出されなかったが古墳時代初頭の土師器が出土しており、弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落の存在が考えられた。

(5) 1985 (昭和60) 年度調査 (85KB 85仁王門)

1985年度には、やはり老朽化した仁王門の解体修理が行われ、現状変更に伴う確認調査が行われていた。調査は仁王門の解体後、基礎部分について行われたが、中世の溝跡及びピット2個が検出されたのみであり、土佐国分寺跡に関する遺構は確認されなかった。なお、最下層は黒茶色砂礫土の地山整地層と見られ、中世以前にさかのぼるものと考えられる。また、現仁王門のコンクリート床下には、3間×3間の門跡の礎石が検出されているが、解体修理の際に仁王像の胎内銘に明暦元年とあり、さらに胎内銘の他の銘文には天明、天保、慶応などの年号も見られることから、度々の改修を受けている可能性もあるが仁王像とともに明暦に建立された仁王門の礎石であると考えられる。

(6) 1987 (昭和62) 年度調査 (87KB第1次国庫補助調査・87参道1・87東庫裡・87東市道)

1987年度にはこれまでの現状変更に伴う発掘調査を踏まえ、今後の保存対策のために国庫補助事業として初めての確認調査が行われた。調査区は国分寺の全般的な状況を確認するため、現状変更の調査結果を加味し書院・本堂・鐘樓周辺及び寺域の東側の4カ所のトレンチ(T-1～T-4)が設定された。

また、同年には国庫補助による調査以外にも老朽化していたセメント張り参道のうち、本堂と仁王門の間の改修、東庫裡の新築及び東側市道3号線の拡幅工事による3件の現状変更に伴う事前の確認調査が行われ、補助事業による調査とともに新たな成果が見られた。

国庫補助による第1次調査では、庫裡と本堂の北側範囲の調査(T-1・3)により寺域の北限を、鐘樓北部(T-4)では参道改修により検出された柱穴の確認、市道の東側部分(T-2)では土塁外における状況を確認するために調査区が設定された。庫裡、本堂の北では溝跡、柱穴等が検出され寺院存続期の建物跡等の存在が確認された。鐘樓北部分では一辺1m強の方形掘方を持つ建物跡の存在が明らかとなったが、掘方埋土は版築状の堆積を示しており、柱痕等も見られないことから礎石に伴う掘込

み地業ではないかと考えられた。これまで中門の推定地であった位置から礎石建物跡が検出されたことにより、伽藍配置の新たな検討が必要となった。土塁の東側では中世の屋敷跡である溝跡や井戸跡が検出されたが、古代寺院に関連する遺構は確認されなかった。現状でも寺域外であり、古代の寺院関連の遺構がないことから、創建時より寺域は土塁のラインを東限としていたと考えられた。

当年度の参道改修に伴う調査(87参道1)は本堂前から仁王門までの間約45mについて行われたが、本堂と中門にかけての調査範囲では近現代の掘削土坑が集中しており、古代寺院に関する遺構は検出されなかった。しかし、鐘樓西側部分では先に述べたように方形掘方が南北に各々3個検出され、補助事業の確認調査により拡張し、3間×6間の東西棟の建物跡が確認されることとなった。また、東車裡(87東車裡)の建築に伴う調査では弥生時代後期末の堅穴住居跡1棟、中世を中心とする溝跡4条、弥生及び近世～近代の土坑4基、柱穴及びピットが検出されたが、確実に古代と見られる遺構を確認することはできなかった。東の市道3号線(87東市道)の拡張に伴う調査では調査区の北部にのみ溝跡等の遺構が見られたが中世を中心とする時期であり、やはり古代の遺構は検出されなかった。

(7) 1988(昭和63)年度調査(88KB第2次国庫補助調査・88参道2・88東市道)

1988年度も昨年度に引き続き国庫補助事業による第2次確認調査が行われ、現状変更に伴う調査も参道改修及び東の市道3号線拡幅工事に伴う調査が継続的に行われた。

第2次国庫補助確認調査は、昨年度の調査結果を基に開山堂の東(T-5)大師堂の南(T-6)、さらに昨年度に調査した本堂北部(T-3)の西に隣接した畑地(T-7)の3カ所を対象として行われた。開山堂東(T-5)では昨年度に確認された建物跡の西辺にあたる柱跡が検出された。柱跡はこれまでと同様に方形掘方の掘込み地業であり、建物跡の全体規模は拵行11.3m、梁間5.3mを測る3間×6間の東西棟である。掘方の中心間寸法は、北辺、南辺では1.5m前後を測り、北東隅及び東辺、西辺では約1.8mを測るが、中央部の掘方間は1.4～1.5mと狭くなっており、建物としては中央の柱間が詰まる構造である。また、建物跡の位置は寺域の中軸線上にあたり、その主軸方向は寺域設定の基本ラインである東土塁の方向N-16°-Eに対し直交している。大師堂南(T-6)では回廊等の確認を目的として調査が進められたが、検出された遺構は弥生時代後期末～古墳時代初頭の堅穴住居跡3棟、溝跡、柱穴等であり、回廊跡は確認されず、古代寺院に関連する遺構は検出されなかった。本堂北(T-7)の調査区では掘立柱建物跡4棟、回廊状遺構1基、溝跡3条、土坑2基、柱穴、ピット等が検出されている。遺構の時期としては切り合い関係や出土遺物から概ね5期にわたるものとされ、白鳳時代後期から平安時代中期にかけての土佐国分寺跡に関する主要な遺構群として捉えられた。掘立柱建物群の性格としては、寺域の北部に展開することから僧坊的な建物群が存在していたのではないかと考えられた。また、遺構の検出状況から見て、従来、東土塁北東コーナーから西へ延びる土塁とその延長線上に続く水路、畦畔のラインが寺域の北限とされていたが、掘立柱建物跡等の遺構がさらに北へ延びていることから、寺域が北へ広がっていることは確実であり、寺域の再検討が必要とされた。さらに、時期的にも白鳳時代にさかのぼる遺構の確認から、土佐国分寺跡に先行する建物群の存在が指摘され、国分寺成立過程についても検討すべき新資料の発見となった。

現状変更に伴う確認調査では、南北参道と中門の間の東西参道の改修及び東側市道3号線の北側部分

の拡張工事に伴う2件の事前確認調査が行われた。東西参道(88参道2)では全体的に近現代の擾乱が多く、遺構としても近世末から近代初頭にかけての採土土坑や廃棄土坑が全面的に切り合っており、古代寺院関連の遺構は確認されなかった。また、市道3号線(88東市道)では弥生時代後期末~古代・中世の土坑、柱穴、ピット等が検出されており、遺構密度が高くなっている。道路拡幅に伴う狭長な調査区であり遺構の性格は不明であるが、寺域東限の土塁外、北東部において古代の遺構群の広がりが確認されたことは、T-7区同様に寺域を検討する上で重要な点とされた。

(8) 1990(平成2)年度調査(90KB第3次国庫補助調査・90便所・90土塀)

1990年度には国庫補助による第3次確認調査が寺域北側の水田(T-8)を対象として行われ、現状変更に伴う事前の確認調査では開山堂南の便所改修(90便所)及び東西参道南側の土塀改修に伴う2件の調査が行われた。

国庫補助によるT-8区では、掘立柱建物跡3棟、塀跡3列、溝跡4条、土坑3基、井戸1基、柱穴、ピット等が検出されており、昨年度調査に引き続き、これまで想定されていた寺域北側にさらに遺構が広がっていることが事実となった。遺構の時期は重複関係及び出土遺物から、古墳時代後期、白鳳~平安時代後期、中世後半とされ、5~6時期にわたる遺構変遷が見られる。土佐国分寺跡に関連する古代遺構としては掘立柱建物跡、塀跡、溝跡、土坑が存在するが、T-7区に比べ遺構密度は低くなっている。また、中世の井戸の存在から、土塁東側と同様に寺院焼失等により平安時代後半には寺域も縮小され、中世段階には現在の寺域とほぼ同じ範囲が中世寺院の寺域として確立した可能性が指摘される。

現状変更に伴う調査として行われた利便施設(90便所)では、段状地形及び溝跡が検出された。調査地点は惣社の南に残る土壇または土塁状地形の一部であり、従来から寺域推定の南限ラインであったが、今次調査による段状地形と溝跡の確認により、寺域南限としてはほぼ確定するものと考えられた。段状地形は地山を整形し南面は斜面となる土塁状を呈しており、上部平坦面には方形掘方を持つ柱穴が検出されている。また、平坦部の南北両側には約8mの間隔で溝跡も確認されており、段状地形及び溝跡の方向は推定寺域基準ラインであるN-16°Eに直交している。溝跡埋土中の遺物から見れば平安時代後期に廃絶したものと考えられ、創建当時からの土佐国分寺跡の寺域を画する遺構としての機能が失われ、塁状地形として残存したものとされた。なお、調査にあたり築地塀の存在も考えられたが、倒壊した築地塀等の存在を示す資料はなく、当初より土塁状の段状地形に板塀等を設けた施設であったと考えられている。東西参道南側の土塀(90土塀)の調査では方形及び円形の柱穴及びピットが検出され、重複関係から2~3時期が考えられた。出土遺物は少量の古瓦、土師器、須恵器等であり古代の柱穴と考えられるが、狭長な調査区であり、その性格は不明である。しかしながら中央部では規則的な柱穴の配置が認められることから掘立柱建物跡もしくは塀跡の可能性も残されている。

(9) 1992(平成4)年度調査(92-4KB 92北庫裡・92-25KB 92参道3)

1992年度には現庫裡北側への新たな庫裡建設(92北庫裡)と中門から客殿、庫裡への参道改修(92参道3)の2カ所の現状変更に伴う事前の確認調査が行われている。北庫裡に伴う調査では、調査区の東端でN-16°Eの主軸を持つ掘立柱建物跡と塀跡が検出されており、建物跡の規模、性格は不明であ

るが、これまでの調査結果と同様に寺域北東部における古代寺院関連の遺構の広がりが確認された。また、中門から書院に至る参道の調査では、近世から近代にかけての掘削跡が大半を占めており、天保年間に存在したとされる経蔵の基礎部と考えられる遺構を除き主要な遺構は確認されなかった。しかし、調査区東部では南北方向の帯状に集中散布する古瓦が検出され、書院及び庫裡の調査において多量に出土した古瓦との関連性が注目される。

(10) 1993 (平成5) 年度調査 (93-14KB第4次国庫補助調査・93-34KB 93光明殿・93参道4)

1993年度には本書により報告する第4次の国庫補助調査が行われた。また、現状変更に伴う事前の確認調査は、老朽化した位牌堂の改築も含め寺域の東側に新たに建設される光明殿の範囲及び光明殿と庫裡間の参道部分について行われた。

第4次国庫補助事業による調査の詳細は第三章において述べるが、今次調査の対象地は、再び現国分寺寺域内での調査可能地である本堂北側の土壇や本堂周辺、南側杉林、東側土塁等でありA～F区の21カ所のトレンチにより行われた。調査の結果、本堂周りのトレンチでは金堂の基壇ではないかと思われる掘込み地床が確認されており、北側の土壇部分では集石中の常滑甕と海獣葡萄鏡片等の検出もあり、大きな成果が見られた。

現状変更に伴う光明殿部分では柱穴、ピット等が検出されたが、時期的にはいずれも近現代であり、古代寺院に関する遺構は検出されなかった。また、参道部の調査においても参道3の調査結果と同様に近世～近代の掘削跡がほとんどであり、古代寺院に関する明確な遺構は確認されなかった。

(11) 1997 (平成9) 年度調査 (97KB中門改修)

1997年度には小規模ではあるが中門改修に伴う現状変更の事前確認調査が行われているが、明確な遺構は検出されなかった。

(12) 2002 (平成14) 年度調査 (02KB21 02東庫裡増築)

2002年度には東庫裡の増築に伴う現状変更の事前確認調査が行われ、土坑6基とピット31個が検出されている。土坑からは少量の古瓦、土師質土器、青磁等も出土したが大半は近世陶磁器であり、その中心は18～19世紀であるため近世末における廃棄土坑と考えられた。また、ピットについても掘立柱建物跡として復元できるものではなく、柱穴からの出土遺物も少量であった。時期的には検出状況等から見て土坑と同時期と考えられ、古代寺院に関する遺構は検出されなかった。

(13) 2003 (平成15) 年度調査 (03KB22下水道工事立会)

2003年度の調査として2004年3月から4月にかけて、東土塁入口周辺を対象に下水道化工事に伴う立会調査が行われた。調査は下水管理設による掘削部分を対象としており、7地点での小規模な立会であるため遺構は確認できなかった。また、東土塁中央の出入口部分の掘削では土塁基底部の確認が期待されたが、土層断面の観察では灰褐色、黒褐色、灰黄褐色、黄褐色等の粘質土がやや乱れを持ち堆積しており、こぶし大の礫等も見られたが、いずれも人為的ではなく土塁基底の集石や版築状の土層堆積は確

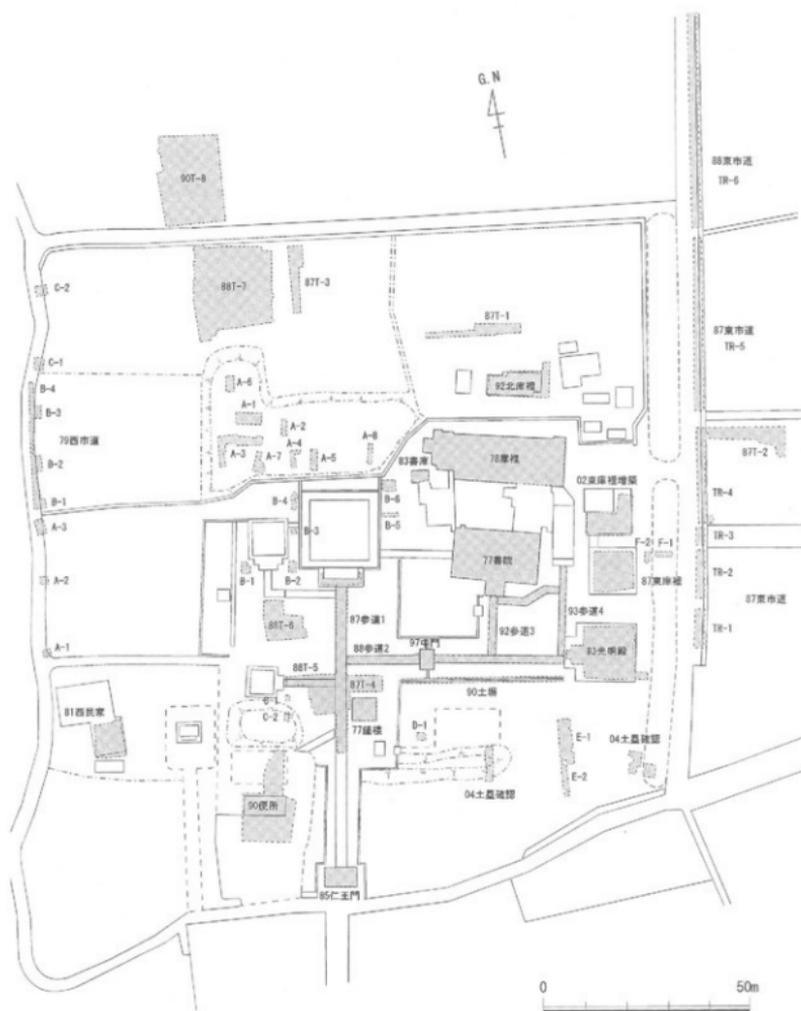
認できなかった。土塁出入口の開口部であることからすれば、すでに削平を受けている可能性も高いが、明瞭な掘削面等は確認されなかった。

(14) 2004 (平成16) 年度調査 (04KB23 04土塁確認)

2004年度には国庫補助による市内遺跡確認調査の一部として、今後保存対策が必要と考えられる土塁等の状況を確認するためにトレンチ調査が行われた。調査トレンチは土塁南東コーナー部及び歴代住職の墓所南の土塁状地形にかけての2箇所を設定された。土塁部ではトレンチの北端部で集石が検出されたが現代の陶磁器が出土しており、トレンチ全体においても特に南西部を中心に現代の陶磁器が出土している。墓所南のトレンチにおいても地山上に現代の瓦片を含む攪乱層が確認され、今回の調査では古代寺院に関する遺構は検出されなかった。なお、林廣裕長老の談話によると、東市道沿いの土塁上には戦時中に迎撃場が何基か造られ、戦後には東南部角地はゴミ捨て場にもなっており、すでにかんりの攪乱を受けているものと考えられる。

元号	調査種別	調査地	名称	調査略号	調査年月日	面積 (㎡)
S52	現状変更	鐘樓建立	77鐘樓	(77KB)	1977年2月4・5日	34
S52	現状変更	書院建て替え	77書院	(77KB)	1977年5月23-28日	400
S53	現状変更	庫裡建て替え	78庫裡	(78KB)	1978年9月1-20日	360
S54	確認調査	市道 (国分寺西側)	79西市道	(79KB)	1979年10月4-9日	85
S58	現状変更	書庫改築	83書庫	(83KB)	1983年4月21-23日	27
S60	現状変更	仁王門解体修理	85仁王門	85KB	1985年11月11-15日	90
S62	第1次国庫補助	第1調査区 (書院北側)	87T-1	87KB	1987年9月21日-10月9日	58
		第2調査区 (寺城東側)	87T-2		1987年9月7-14日	87
		第3調査区 (金堂北側)	87T-3		1987年12月17-21日	41
		第4調査区 (鐘樓北側)	87T-4		1987年12月22-27日	32
		東庫裡新築	87東庫裡		87KB	1987年8月20日-9月10日
	現状変更	市道3号線1 (東市道)	87東市道	KBER	1987年9月21-30日	169
		参道1 (仁王門-金堂)	87参道1	87KB	1987年11月9-30日	120
		第5調査区 (鐘樓西側)	88T-5	KBK	1988年9月16-25日	60
		第6調査区 (大師堂前)	88T-6	KBT	1988年9月26日-10月3日	114
		第7調査区 (金堂北側)	88T-7	KBL1	1988年10月4-31日	480
S63	現状変更	参道2 (中門西)	88参道2	KBS	1988年9月6-9日	30
		市道3号線2 (東市道)	88東市道	KBER	1988年9月16日-10月31日	80
		第8調査区 (寺城北側)	90T-8	90KB	1990年9月27日-11月30日	330
H2	現状変更	土層改築	90土層	90KB	1990年6月5-19日	34
H4	現状変更	便所改築	90便所	90KB	1990年6月20日-7月7日	136
		北庫裡新築	92北庫裡	92-4KB	1992年4月27日-5月15日	90
		参道3 (中門-書院)	92参道3	92-25KB	1992年10月12日-11月3日	130
H5	第4次国庫補助	本堂北葺	A-1~8	93-14KB	1993年6月1日-12月20日	92.3
		本堂周り	B-1~6			29.4
		周山堂南	C-1・2			5.9
		住職墓苑	D1			3.6
		南西林地	E-1・2			48.2
		東土塁	F-1・2			10.2
	現状変更	参道4 (光明殿西)	93参道4	93-34KB	1993年5月10-28日	170
	光明殿	93光明殿	93KB	1993年6月1日-8月9日		
H9	現状変更	中門改築	97中門	97KB	1997	38
H14	現状変更	東庫裡増築	02東庫裡増築	02KB	2002年6月10-28日	78
H15	現状変更立会	東入口周り水洗化			2004年3月24日-4月16日	
H16	国庫確認調査	土塁確認	04土塁確認	04KB	2004年7月12-28日	45.4

第2表 土佐国分寺跡調査一覧表



第7図 土佐国分寺跡全体調査区設定図 (S=1/1,200)

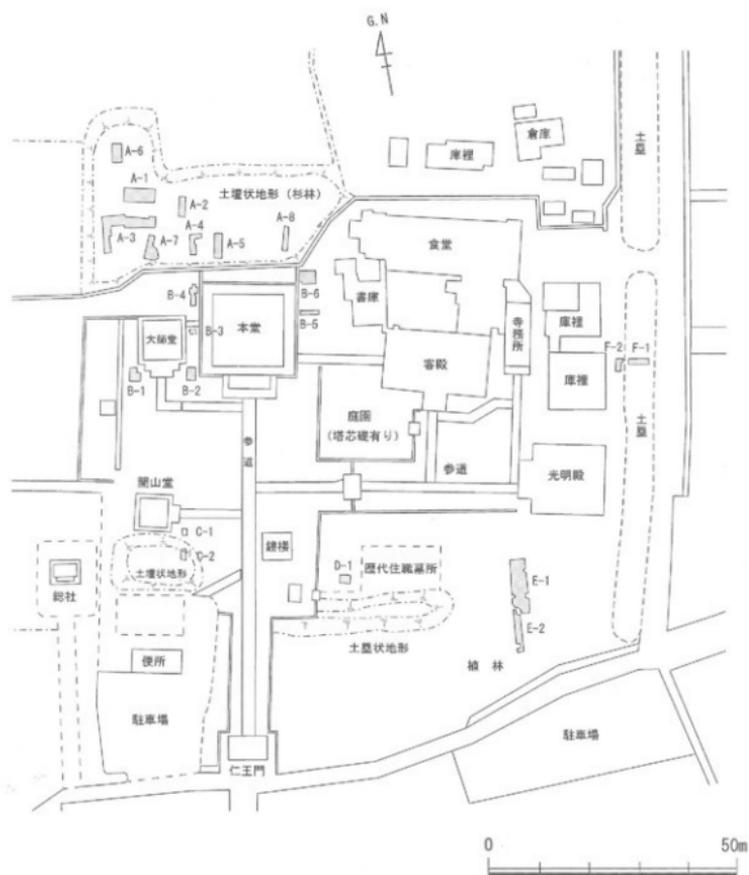
Ⅲ 第4次調査の内容

1 調査の方法

史跡土佐国分寺跡の国庫補助事業による発掘調査は昭和62年度に第1次調査、昭和63年度には引き続き第2次調査、平成2年度に第3次調査が行われており、第1～3次調査を通じてT-1～T-8の8カ所の調査区が設定されている。中でも、先に述べたようにT-7・8区では複数の掘立柱建物跡等が検出されており、土佐国分寺に先行する寺院の存在や当該期の僧坊跡等ではないかと推定されている。しかし、金堂跡等については、これまでの調査では有効な手がかりはつかめておらず、伽藍配置を検討するには資料不足と言わざるを得なかった。このため補助事業による調査及び現状変更等による確認調査の結果も含め、再度全体的様相を知るためにも第4次調査として平成5年度に国庫補助による発掘調査が実施された。

発掘調査対象地は現国分寺の中で発掘に支障のない場所を国分寺と協議の上選定し、トレンチによる確認を行うことを基本として進められた。その結果、現本堂北の土壇状地形を呈する杉林部（A区）、本堂・大師堂周辺部（B区）、開山堂南の土壇状地形部（C区）、住職墓所西の土壇状地形部（D区）、南東杉林部（E区）、東土塁部（F区）に調査区を設定した。調査区は対象地によって上記のようにA区～F区とし、A区はA-1～A-8区の8カ所、B区はB-1～B-6区の6カ所、C区はC-1・C-2区の2カ所、D区はD-1区1カ所、E区はE-1・E-2区の2カ所、F区はF-1・F-2区の2カ所であり、合計21カ所のトレンチであった。調査面積はA区92.3㎡、B区29.4㎡、C区5.9㎡、D区3.6㎡、E区48.2㎡、F区10.2㎡であり、合計189.6㎡であった。調査にあたっては狭小な調査区のためすべて人力により掘削を行い、遺構検出に努めた。調査区の測量に関しては公共座標第IV系を基準に行ったが、一部の調査区及び調査区の配置等については平板により実測を行った。

発掘調査は平成5年6月1日より開始され、まずF区から着手された。6月中旬にかけてF区の調査を進めるとともにE区の調査が開始された。6月後半から7月にかけてはA区の調査にも着手されたが、同時期には前後して参道改修（93参道4）及び光明殿新築（93光明殿）の現状変更に伴う確認調査も行われた。10月にはB区の調査に着手し、各調査区の調査を進めながら下旬にはC区、D区についても調査を行った。11月にはA区にA-7・8区等の新たな調査区の設定や拡張を行い、12月にかけて各調査区の実測等の作業を行いつつ、埋め戻しを行い、12月20日をもって調査を終了した。



第8図 土佐国分寺跡第4次調査区設定図 (S=1/1,000)

2 A～F区の調査

(1) A区

A区は本堂及び大師堂の北裏に存在する土壇状地形部分を調査対象としてA-1区～A-8区の8カ所のトレンチにより調査が行われた。土壇状地形は他に比べ1.3～1.5mほど高く、中央部が東西に盛り上がり土塁状となり緩やかな起伏がみられる。現状の規模は東西方向に約52m、南北方向には20mであるが西部約15m部分が北に約15m張り出し、L字状となっている。また、西辺は南北方向の水路により終わっている。これまで寺域内の配置を考えたときに、この土壇状部分が金堂跡または講堂跡の有力な候補地として推定されており、今時の調査での基壇跡等の確認が期待されていた。

調査はほぼトレンチ番号順に行われ、集石、ビット等が検出されたが、西側（張り出し部分を含め）を除いた範囲のA-2・4・5・8区のトレンチの調査結果では、盛土中から近現代の陶磁器が出土しており、土壇状の地形が形成されたのは近世以降と考えられる。しかし、北張り出部を含む西半部では基壇状の盛土と集石が検出されており、その性格は不明であるが基壇状地業が行われたものと考えられる。

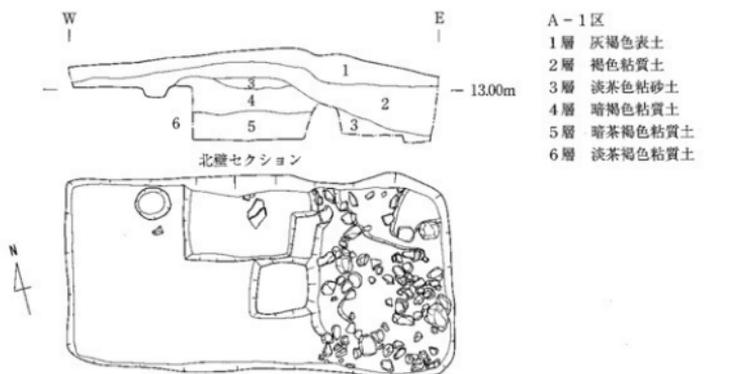
また、A-6区では集石面より常滑大甕とともに海獣葡萄鏡片が出土しており、中世における国分寺の状況を示す資料として注目される。

(1) A-1区

A-1区は基壇状地形の西部中央に最初に設定された幅3.2m×長さ6.1m×深さ1.5m、調査面積17.2㎡の東西トレンチである。調査区の層位は、1層灰褐色表土(25cm)、2層褐色粘質土(25～80cm)、3層淡茶色粘砂土(16cm)、4層暗褐色粘質土(35cm)、5層暗茶褐色粘質土(50cm)、6層淡茶褐色粘質土(地山)であり、東半部では2層が厚さを増し、3～5層を切り込んだ状態である。調査区の東部では東へ落ち込む2層の下面で東へ傾斜を持つ拳大から人頭大の礫による集石が検出された。集石中からは土師器、須恵器、古瓦とともに土師質土器が出土しており、時期的には中世と考えられた。また、北西部にはビット1個が検出されているが、2層掘込みであることから集石と同様に中世の遺構と考えられる。出土遺物としては土師器片、須恵器碗(輪高台)・甕片、土師質土器では内面口ロ口目、糸切り底部の杯・小杯・小皿とともに天目片が出土しており、量的には土師質土器の小片がほとんどを占めている。

(2) A-2区

A-2区は本堂の北、A-1区の東約6.5mに設定された南北トレンチであり、幅1.4m×長さ4.3m×深さ1.4m、調査面積5.5㎡であった。調査区の層位は、1層灰褐色表土(20cm)、2層灰褐色土(25cm)、3層暗褐色土(40cm)、4層黒灰褐色土(15cm)、5層黒色土(30cm)、6層茶色粘質土(地山)であり、ほぼ水平堆積をなしているが、南端部では4層が消滅している。明確な遺構の検出はなかったようであり、2～5層中には土師質土器の細片を含んでいる。2～5層の出土遺物には古瓦、新瓦、土師器、土師質土器等が存在するが、土師器には輪高台、土師質土器には糸切り柱状高台に内面口ロ口目が見られ、量的には土師質土器杯の小片が大半を占めており、同層は中世における堆積層と考えられる。



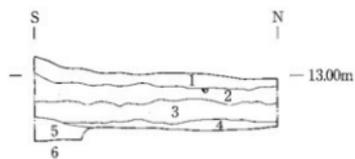
A-1区

- 1層 灰褐色表土
- 2層 褐色粘質土
- 3層 淡茶色粘砂土
- 4層 暗褐色粘質土
- 5層 暗茶褐色粘質土
- 6層 淡茶褐色粘質土

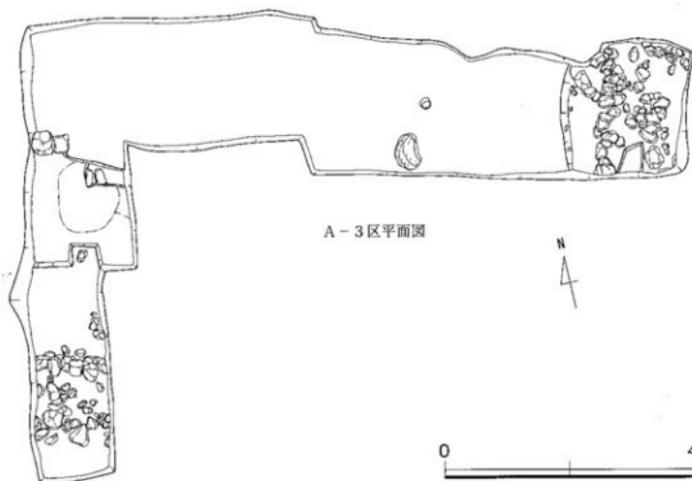
A-1区平面図・北壁セクション図

A-2区

- 1層 灰褐色表土
- 2層 灰褐色土
- 3層 暗褐色土
- 4層 黒灰褐色土
- 5層 黒色土
- 6層 茶色粘質土



A-2区西壁セクション図



第9図 A-1～3区平面図・セクション図 (S=1/80)

(3) A-3区

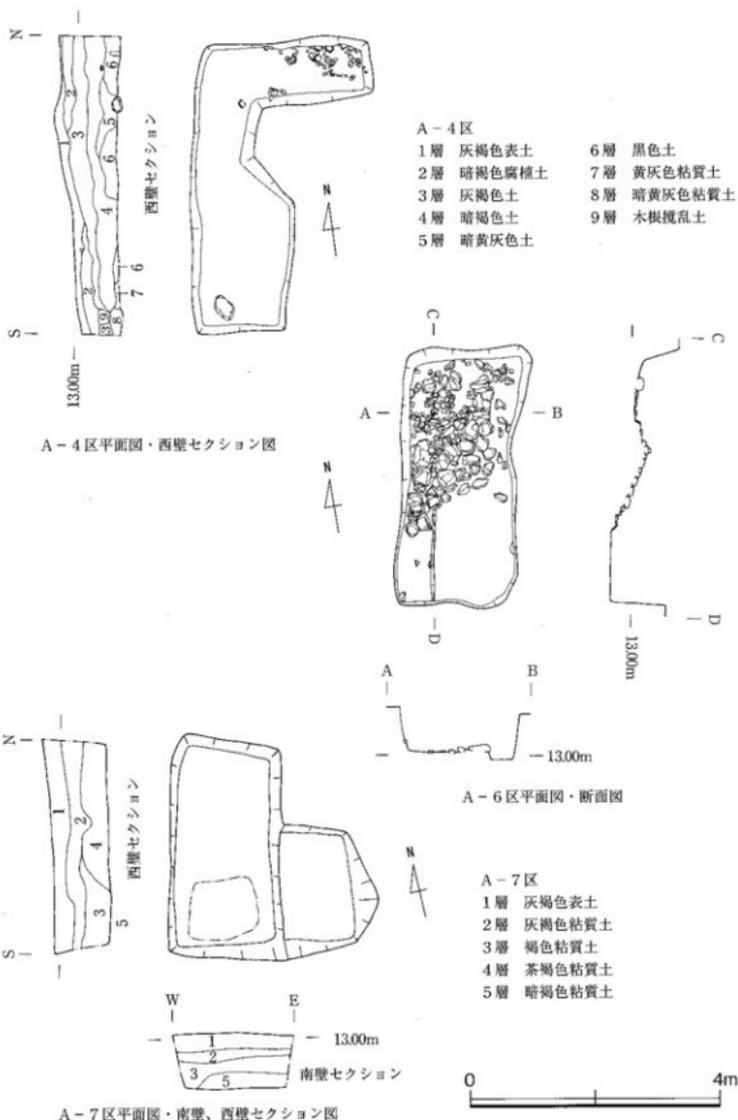
A-3区はA-1区の南約2mの地点に設定された、幅2~2.5m×長さ10.8m×深さ0.6mの東西トレンチであり、立木等の関係もあり不整形方形となった。また、西端部から南へ幅1.4~1.8m×長さ5.4mの拡張を行い、最終的にはL字状の調査区となり、調査面積は30.9㎡であった。調査区の層位はA-1区と類似した褐色~暗茶褐色粘質土の堆積が見られようである。遺構は調査区の東端部及び南端部でA-1区同様に拳大から人頭大の礫による集石が検出されており、東端、南端部ともに一定の集石ラインが見られる。また、当初の東西トレンチの中央部には礎石と考えられる長径60cmの平石も確認されている。さらに、南拡張部の北部における確認の深掘りトレンチでは茶褐色粘質土上において1m×1.4mの楕円に近い隅丸方形のプランも確認され、柱穴と考えられた。A-3区の出土遺物には古瓦とともに須恵器、土師器、柱状高台を持つ土師質土器、青磁等が見られ、砥石も1点出土している。遺物出土状況や集石遺構、土層堆積状況からすれば、やはり中世を中心とする時期と考えられたが、深掘りトレンチ底部の地山掘込みの柱穴については、検出状態から見て古代である可能性が強いと思われる。

(4) A-4区

A-4区は本堂北のA-2区の南約3.5mの位置に設定された幅1.6m×長さ4.8m×深さ1mの南北トレンチであるが、立木のため北半部が狭くなっている。また、北端部から東へ幅1m×長さ1.2mの拡張を行い、やはりL字状の調査区となっており、調査面積は7.8㎡であった。調査区の層位は1層表土(15cm)、2層暗灰褐色腐植土(15cm)、3層灰褐色土(30cm)、4層木根擾乱土(20cm)、5層暗褐色土(20cm)、6層暗黄灰色土(20cm)、7層黒色土(24cm)8層黄灰色粘質土(地山)であり、5~7層中には土師質土器片を含んでいる。土層の堆積状況は、南へやや傾斜し堆積層は薄くなっているが木根による攪乱以外には大きな乱れはない。また、調査区南半部では5層から7~8層地山まで掘込まれた溝跡と考えられる堆積が見られる。同じく北半部に見られる6層は黒色土ブロックを含んでおり、下層の7層を切り込んだ堆積状況である。遺構としては先に述べた5層掘込みの溝跡と見られるプランが存在するようであり、また、南端部では7層中に40cm×25cmほどの平石が確認され、礎石の可能性が考えられている以外には、他に明確な遺構は検出されなかった。遺物出土状況としては拡張部分の東半部においてやはり7層中より瓦片が一定まとまり出土しているが、これに伴う掘込み等は確認されず、包含層中の出土である。出土遺物は古瓦、須恵器、土師器、土師質土器等であるが、やはり量的には土師質土器が最も多量である。また、弥生土器として波状脚描文の壺口縁も出土している。

(5) A-5区

A-5区は本堂北、A-4区の東約3.5mに設定された南北トレンチであり、幅1.5~1.8m×長さ5m×深さ0.8m、調査面積8.7㎡を測る方形の調査区である。調査区の堆積土層は暗褐色土を中心とする堆積と見られ、基本的には他の調査区と同様に水平堆積の状況である。明確な遺構は確認されておらず、遺物としては古瓦とともに新瓦も出土しており、他に柱状高台を持つ土師質土器を中心に若干の弥生土器や須恵器、近世陶磁器等も出土している。



第10図 A-4・6・7区平面図・断面図・セクション図 (S=1/80)

(6) A-6区

A-6区は土壇状地形の北西張出部、A-1区の北約5.2mに設定された南北トレンチであり、幅2m×長さ4m×深さ0.9m、調査面積8㎡を測る調査区である。調査区の土層はA-1区と同様に暗褐色及び茶褐色が見られたようである。遺構としては、調査区の北半部から拳大から人頭大の礫による集石が検出されている。集石の頂部は地表下40cmであり、調査区底面から約50cmの高さを測り、南へ傾斜を持っている。集石の中央部からは常滑大甕が出土しており、甕底部からは海獣葡萄鏡片も出土している。また、集石中及び土壇下層の盛土中からは備前播鉢、瓦質土器等が出土している。調査者によれば、集石はA-1・A-3区で検出された集石に続く土壇の北辺を区切るものであり、この北辺集石上に同大の円礫をほぼ円形に積み、中央部に海獣葡萄鏡片を入れた常滑大甕を据えたものであり、経塚とされている。他の遺物としては古瓦とともに新瓦も出土しており、弥生土器、須恵器、土師器、青磁等も見られる。

(7) A-7区

A-7区は大師堂北、A-3区東端から南約4mの位置に設定された幅1.8m×長さ3.6m×深さ1mの南北トレンチであり、南部約2/3を幅1.6m×長さ2.2mで東に拡張している。調査面積は8.8㎡であった。調査区の層位は1層褐色表土(24cm)、2層灰褐色粘質土(20cm)、3層褐色粘質土(25cm)、4層茶褐色粘質土(40cm)、5層暗褐色粘質土(30cm)であり、基本的にはほぼ水平の堆積状況であるが、西壁の北半部では2層下は4層となっており、南半部では4層が落ち込み3層が見られる。また、南壁では4層がなく3層下は5層となっている。検出された遺構は柱穴プラン1個であり、調査区底部で一辺1m前後の方形掘方を持ち埋土は黒褐色粘質土である。遺物は古瓦とともに土師質土器片が少量出土している。

(8) A-8区

A-8区は本堂北の土壇状地形の東端に近い位置に設定された南北トレンチであり、A-5区から東へ約12mの地点である。調査区は幅1m×長さ5.4m×深さ1.2mであり、調査面積は5.4㎡であった。調査区の層位は1層暗褐色表土(50cm)、2層赤茶色土(20cm)、3層暗茶褐色土(40cm) 4層攪乱土(20cm)であり、地表面は地形にそって南へ傾斜しているが下層はほぼ水平堆積である。遺構は確認されおらず、出土遺物には古瓦、少量の須恵器、土師質土器、備前片等が見られるが、3層中からも近現代の陶磁器等が出土しており、土壇状地形の東部堆積土は時期的に新しいものであることが確認された。

(2) B区

B区は本堂の周辺及び大師堂の南面を対象とした範囲であり、金堂跡の確認を主たる目的として調査区が設定された。調査範囲が本堂や大師堂等の現建物の周辺部であることから狭小なトレンチによる調査が中心となり、B-1区～B-6区の6カ所の調査区が設定された。B-1区は大師堂南西前面に、B-2～B-4は本堂の西、大師堂との間に位置し、B-5・6は本堂の北東及び東に位置している。調査の結果としては、B-2区からB-6区にかけて掘込み地業による版築が確認され、金堂跡の遺構として位置付けられ、金堂の位置がほぼ確定したものと考えられた。

(1) B-1区

B-1区は大師堂の南西前面に設定された幅2.4m×長さ2.8m×深さ0.5mのほぼ方形のトレンチであり、北東部を一部欠いている。調査面積は6㎡であった。調査区の層位は1層茶褐色表土(15cm)、2層暗黄褐色土(20cm)、3層黄茶色土(8cm)、溝跡の埋土として4層黒褐色土(約1m)であり、ほぼ水平堆積である。検出された遺構は調査区西半で確認された南北方向の溝跡1条であり、古代寺院に関連する遺構は検出されていない。溝跡は幅50cm、検出長2.8m、深さ約1mを測り、埋土は黒褐色土(4層)である。出土遺物が乏しいため時期的には不明瞭であるが、表土下2・3層を掘込んでいることから中世以降の時期が考えられる。出土遺物は古瓦とともに少量の須臾器と一定量の土師質土器が見られる。

(2) B-2区

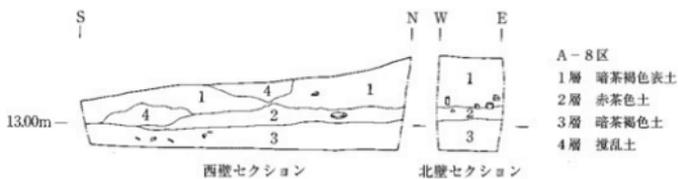
B-2区は本堂と大師堂の間の南に設定された南北トレンチであり、本堂の南縁ラインにかかる位置である。調査区は幅1.9m×長さ3.2m×深さ0.7mを測り、調査面積は6㎡であった。調査区の層位は1層表土(5cm)、2層茶色土(5cm)、3層暗茶褐色土(16cm)、4層暗茶灰色土(12cm)、5層明黄茶褐色土(8cm)が基本層序であり、6層暗褐色土(約30cm)は竪穴住居跡の埋土、7層暗黄褐色土(32cm)はビット埋土、8層は攪乱土である。遺構としては、調査区のほぼ全体にかかる方形の竪穴住居跡が検出されており、調査区南端部には住居跡のコーナー部が見られるが、全体の規模は調査区外に伸びており不明である。埋土は暗褐色土であり深さ約30cmを測るがビット等は確認されておらず、床面はさらに下層であり、時期的には出土遺物により古墳時代後期とされている。B-2区で注目される遺構は、調査区北部で検出された掘込み版築による地業である。調査区北端から80cmの範囲の掘込み中には8~15cmの黒褐色土、茶褐色土、暗褐色土及び淡黄色土が互層となった版築土が確認され、いずれも堅く叩き締められており、検出状況及び調査区の位置関係から見て金堂の基壇に関する遺構と考えられた。出土遺物には古瓦片とともに須臾器片、土師器片等が見られるが中世に関連する遺物はほとんど出土していない。また、竪穴住居跡の埋土中からは叩目を残す土師器や須臾器の甕・壺等が出土している。

(3) B-3区

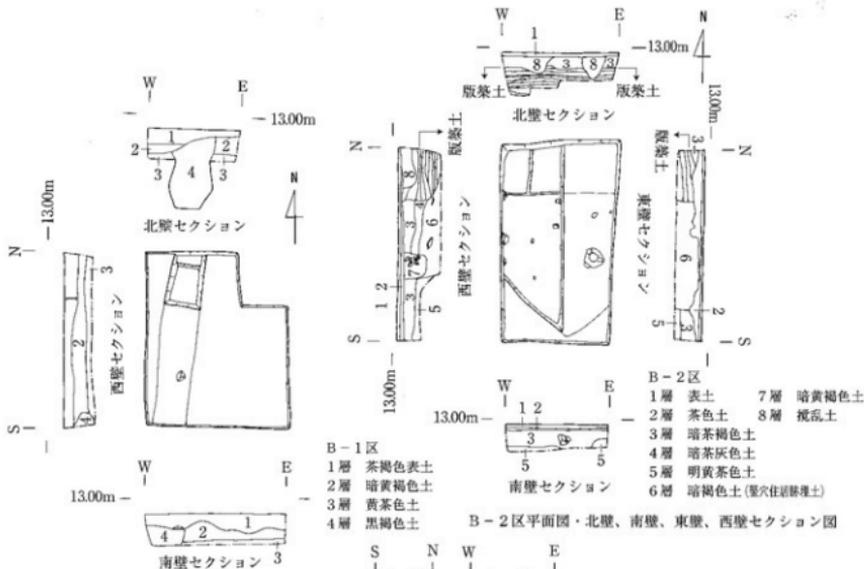
B-3区はB-2区と同様に本堂と大師堂の間に設定された調査区であるが、本堂のほぼ中央部の西に位置する。調査区は幅0.9m×長さ1.4m×深さ0.7mを測り、調査面積は1.3㎡の小トレンチである。調査区の層位は1層表土(8cm)、2層茶灰色粘質土(4cm)、3層黒褐色粘質土(12cm)であり、以下4~10cmの暗褐色、灰褐色、茶褐色、褐色、茶色、明黄茶色の粘質土が版築土として互層となり見られる。なお、3層は調査区の半部で切れており、以下の版築土層も若干ではあるが北へ落ち込む堆積状況である。B-3区は全面が版築土となっており、同層中からの出土遺物は見られなかった。

(4) B-4区

B-4区はB-2・3区の北部延長上、本堂の西縁北端部に沿って設定された南北トレンチであり、幅0.8m×長さ4.5m×深さ0.3mを測り、調査面積は3.6㎡であった。調査区の層位は1層攪乱土、2層表



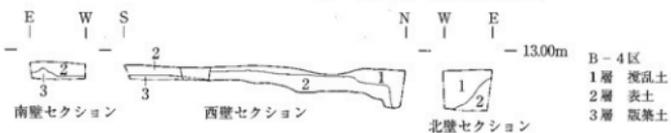
A-8区西壁、北壁セクション図



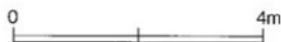
B-1区平面図・北壁、南壁、西壁セクション図



B-2区北壁、西壁セクション図



B-3区南壁、西壁、北壁セクション図



B-4区南壁、西壁、北壁セクション図

第11図 A-8、B-1~4区平面図・セクション図 (S=1/80)

土(20cm)、3層版築土であり、版築土上面を確認しているが、検出状況から見てかなり削平を受けているものと考えられる。出土遺物には古瓦、土師器片等が少量見られるが、近現代の陶磁器類が大半であった。

(5) B-5区

B-5区は本堂の東側、本堂の基礎より2mの位置に設定された東西トレンチである。調査区は幅1m×長さ4m×深さ0.5mを測り、調査面積は4㎡であった。調査区の層位は1層表土(12cm)2層灰茶褐色土(30cm)であり、3層黒褐色土、4層黒茶色土、5層明黄茶色土は10cm前後のブロック状の堆積である。6層は茶褐色土の溝跡埋土(12cm)であり、7層は版築土面となっている。8層は消火栓埋設の攪乱土である。検出された遺構は、幅60cmを測る南北方向の溝跡1条と版築土である。溝跡は埋土中の出土遺物により平安時代後期と考えられ、版築土を掘込んでいる。7層版築土の範囲は調査区西端より2.8mのラインで南北方向に認められ、掘込み基壇の東辺を画するものと見られる。出土遺物には少量の古瓦、土師質土器、近世陶磁器が見られる。

(6) B-6区

B-6区はB-5区の北約5.3m、本堂の北東角より2mの位置に設定された幅2.6m×長さ3m×深さ0.4mを測る東西トレンチであり、西側に幅0.3m×長さ2.2mで拡張され、調査面積は8.5㎡であった。調査区の層位は1層表土(16cm)、2層灰茶色土(30cm)3層灰褐色土(12cm)4層茶灰色土(18cm)、5層暗茶灰色土(10cm)、であり、3・5層はブロック状の堆積である。6層は明黄褐色土の地山、7層は茶褐色土の溝跡埋土(20cm)、8層版築土面であり、B-5区と類似した層序となっている。検出された遺構はB-5区から続く南北方向の溝跡1条と版築土であり、やはり溝跡により版築土が掘込まれている。版築土の範囲は調査区西端から2.8mに南北ラインが確認され、北東部のコーナーから南北方向のラインは南端より2.4mであった。なお、調査区中央北寄りには攪乱坑が存在する。掘込み地業による版築土の範囲はB-5、B-6区ともに現本堂の基礎部から東へ約4.2mのラインとなり、これを金堂基壇の東辺とし、基壇北東コーナー部もB-6区では確認されたものと考えられる。遺物としては古瓦片少量とともに版築土中からは土師器片も少量出土している。

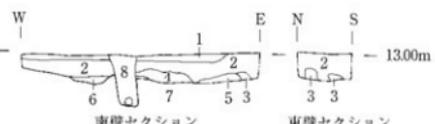
[C区]

C区は開山堂の南に位置する土壇状地形を対象としており、C-1区及びC-2区の2カ所の調査区が設定された。対象とした土壇状地形の西には惣社が存在し、南に接しては寺域南限を画すると考えられる段状地形及び溝跡が確認されている。また、寺域東南部の歴代住職墓所に塔基礎が過去に所在していたことから塔跡と推定されており、これと対称の位置となるこの土壇状地形も塔自体は存在しないが、西塔の基壇にあたる可能性も指摘されている場所であった。

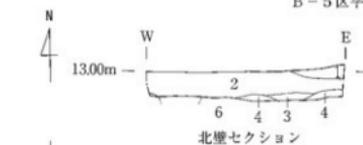
(1) C-1区

C-1区は開山堂前、土壇状地形の北裾部に設定された一辺1.5m、深さ1.4mの正方形のトレンチで

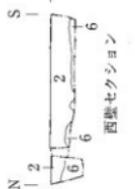
- B-5区
 1層 表土
 2層 灰茶褐色土
 3層 黒褐色土
 4層 黒茶色土
 5層 明黄茶色土
 6層 茶褐色土(溝埋土)
 7層 版築土
 8層 枕乱土



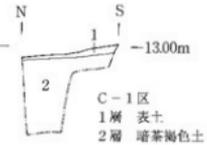
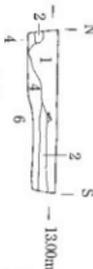
B-5区平面図・南壁、東壁セクション図



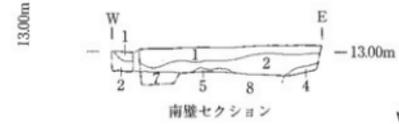
- B-6区
 1層 表土
 2層 灰茶色土
 3層 灰褐色土
 4層 茶灰色土
 5層 暗茶灰色土
 6層 明黄褐色土
 7層 茶褐色土(溝埋土)
 8層 版築土



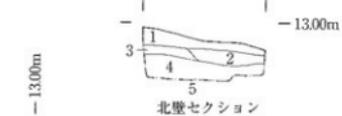
東壁セクション



C-1区東壁セクション図



B-6区平面図・北壁、南壁、東壁、西壁セクション図



D-1区平面図・北壁、西壁セクション図



- C-2区
 1層 表土
 2層 黒色土
 3層 茶色砂質土

C-2区平面図・東壁セクション図

- D-1区
 1層 表土
 2層 褐色粘質土
 3層 茶褐色粘質土
 4層 灰褐色粘質土
 5層 茶褐色礫土(地山)



第12図 B-5・6、C-1・2、D-1区平面図・セクション図 (S=1/80)

あり、調査面積は2.3㎡であった。調査区の層位は1層表土(10cm)、2層暗茶褐色土(1.3m)であり、表土下はすべて2層の堆積であった。明確な遺構は検出されず、出土遺物には少量の古瓦、須恵器、土師器片等とともに近現代陶磁器が見られ、新しい時期の堆積層と考えられた。

(2) C-2区

C-2区はC-1区の南約3mの位置に設定された、幅1.4m×長さ2.6m×深さ1mの南北トレンチであり、調査面積は3.6㎡であった。調査区の層位は1層表土(70cm)、調査区南端部に2層黒色土(30cm)が見られ中央部から北部には3層茶色砂質土(30cm)が見られた。遺構としては調査区の底面3層中に茶灰色粘質土を埋土とする円形のピットと考えられるプランが検出されたが不明瞭であり、時的にも不明であった。遺物は古瓦や新瓦、須恵器、土師質土器片等とともに近現代の陶磁器が出土しており、C-1区と同様に新しい時期の堆積であり、土壇状地形も近世以後の盛土により形成されたものと考えられる。

[D区]

(1) D-1区

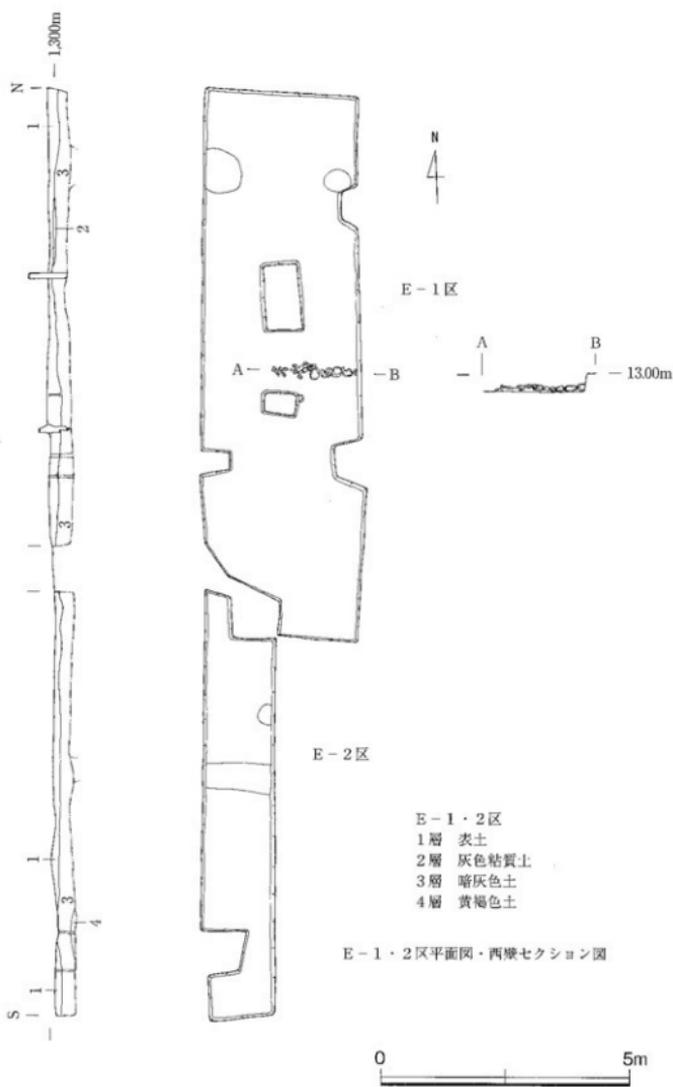
D-1区は塔跡の基壇等を確認することを目的として塔跡推定地である寺域東南部の歴代住職墓所の西側に隣接して設定された、幅1.8m×長さ2.0m×深さ0.8mの東西トレンチであり、調査面積は3.6㎡であった。調査区の層位は1層表土(36cm)、2層褐色粘質土(20cm)、3層茶褐色粘質土(16cm)、4層灰褐色粘質土(36cm)、5層茶褐色礫土(地山)であり、表土下では西半部に3層が見られ、東半部では2層となっているが、ほぼ水平堆積の状況である。出土遺物は2・3層を中心に土師質土器片が見られるが、5層上面では調査区北東部に瓦片がある程度まともに出て出土している。調査状況からすれば、塔跡の基壇を示すような土層堆積は確認されなかった。なお、D区における調査区はD-1区の一箇所のみであった。

[E区]

E区は寺域の南東部であり、東土塁の南端部と歴代住職墓所の南に位置する土塁状地形が切れた間の平地である杉林を対象としている。調査は参道西側の便所改修に伴う確認調査で検出された段状地形及び溝跡の延長線上における土塁(段状地形)の有無を目的としており、南北に連なる2箇所の調査区により確認が行われた。

(1) E-1区

E-1区は土塁推定ラインのやや北寄りに設定された、幅3.2m×長さ11m×深さ0.5mの南北トレンチであり、調査面積は35.2㎡であった。調査区の層位は1層表土(20cm)、2層灰色粘質土(5cm)、3層暗灰色土(25cm)であり、2層は調査区北よりの一部に見られるのみである。検出された遺構は2箇の円形ピットのプラン及び中央部の石列である。ピットは直径50cmと90cmを測り、埋土は暗褐色土であった。また、石列は東西方向に10~20cmの礫を並べたものであり、検出長は東壁より約1.75mであつ



第13図 E-1・2区平面図・セクション図 (S=1/100)

た。出土遺物は近現代陶磁器が大半を占めており、少量の土師質土器片が見られたが瓦片は出土しなかった。

(2) E-2区

E-2区は、E-1区に接し南へ続く南北トレンチであり、幅1.5m×長さ8.7m×深さ0.4mを測り、調査面積は13㎡であった。調査区の層位もE-1区と同様であるが、1層表土下には3層暗灰色土が存在しており、南部の一部には4層黄褐色土(8cm)が見られた。検出遺構は溝跡及びピットのプランであり、溝跡は東西方向で幅50センチ、ピットは直径約90cmを測る。出土遺物もE-1区同様に近現代の陶磁器片であり、瓦等は出土していない。

[F区]

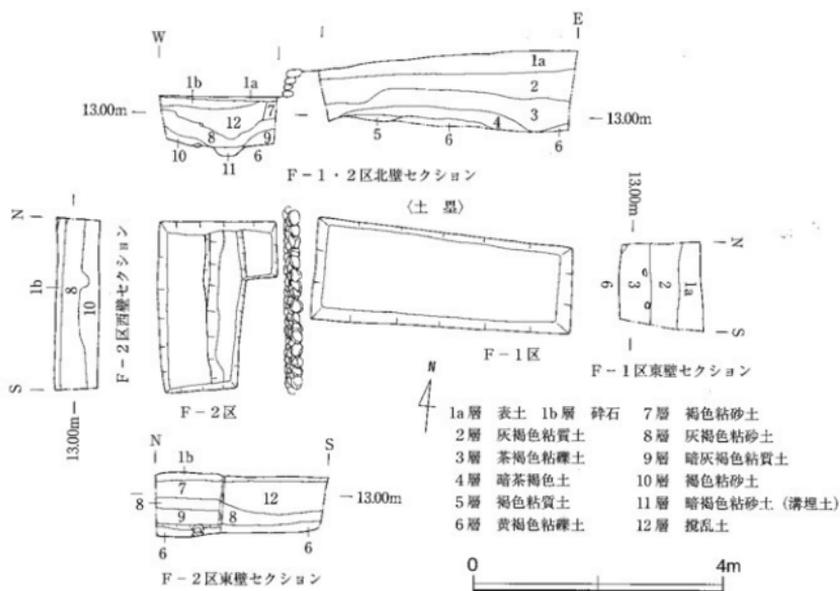
F区は東土塁の状況を確認するために設定された調査区であり、土塁上のF-1区と土塁西側裾部のF-2区の2個のトレンチにより調査が行われた。

(1) F-1区

F-1区は東土塁の中央出入口部分から南へ17.5mの地点に位置し、土塁中央部から西側にかけて土塁を断ち割るように設定された、幅1.5m×長さ4m×深さ1.4mを測る東西トレンチであり、調査面積は6㎡であった。調査区の層位は1a層表土(35cm)、2層灰褐色粘質土(44cm)、3層茶褐色粘礫土(52cm)、4層暗茶褐色土(20cm)、5層褐色粘質土(8cm)、6層黄褐色粘礫土(12cm)であり、若干西への傾斜を持つがほぼ水平堆積であり、土塁構築に伴う版築等の堆積は認められなかった。出土遺物には若干の古瓦片もあるが大半は近現代の陶磁器類であり、下層の4層中からも新瓦や陶磁器類の出土が見られた。

(2) F-2区

F-2区はF-1区の西側、現土塁の堀石垣脇に設定された南北トレンチであり、幅1.5m×長さ2.8m×深さ1mを測る。調査区の東壁に沿って溝跡が検出されたため北東部を幅0.3m×長さ0.9mで東へ拡張した。調査区の層位はF-1区から続く層序として1a層表土(5cm)、1b層砕石(12cm)、7層褐色粘砂土(24cm)、8層灰褐色粘砂土(18cm)、9層暗灰褐色粘質土(20cm)、10層褐色粘砂土(15cm)であり、11層は溝埋土の暗褐色粘砂土(15cm)、12層は攪乱土であった。検出された溝跡は幅60センチ、深さ16cmほどの南北方向であり、土塁に平行していると見られる。埋土は11層暗褐色粘砂土であり、検出長は2.8mであった。出土遺物は中央部が大きく攪乱されていることもあり、F-1区と同様に近現代の陶磁器類が大半を占めている。溝跡からの出土遺物はほとんどなかったが、土師器等の細片含んでいたことから古代に関連する遺構と考えられた。



第14図 F-1・2区平面図・セクション図 (S=1/80)

IV 遺構と遺物

1 遺構

今回の発掘調査では柱穴、ピット、溝跡等の一部が確認されたが、トレンチによる調査であったため、面的な広がりの中で遺構を確認することはできなかった。しかし、本堂周辺の調査区からは掘込み地業に伴う版築土が検出されており、金堂に伴う基壇跡と考えられ大きな成果であった。

まず、本堂及び大師堂北の土壇状地形を対象としたA区ではA-1・3・6区において基壇と考えられる遺構の一部が検出されている。形状としては土壇状地形の西部が北へ張り出した範囲であり、A-6区で北辺、A-1区及びA-3区の東端において東辺が、同じくA-3区の南端で南辺が確認され、拳大から人頭大の円礫を積んだ集石が盛土の止めとして検出されている。基壇状遺構は標高12.2m前後の淡茶褐色粘質土を基層として、暗褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、淡茶色粘砂土を盛り上げ、裾部に止めの集石を施したものであり、その規模はA-3区及びA-6区で確認された南辺と北辺により南北20mであることが判明している。東西についてはA-3区東端の東辺のみの確定であるため不明であるが、北へ張り出した地形から見て東西の規模は約10mと考えられる。また、A区において注目される遺構としてA-6区の基壇状遺構の集石中において経塚状の集石遺構が検出されている。集石はやはり拳大から人頭大の円礫を円状に積んだものであり、規模は1.3m×1.7mと全体の3/4ほどが確認されている。集石中からは常滑甕片がまとまって出土しており、ほぼ中央部に底部の破片が存在することから集石中央に常滑甕を据えたと考えられる。底部片の内底からは海獣葡萄鏡片が出土しており、常滑甕に納められ埋納されたものであるが、他に埋納経等の出土はないことからすれば、経塚とは断定できない。期的にみれば常滑甕はN字口縁及び器形から13世紀末から14世紀前半であり、同じく集石下の基壇盛土中から出土した備前挿鉢も同時期であることから、基壇状遺構及び経塚状遺構の形成時期は中世、室町時代前半期を前後する時期と考えられる。本堂北の土壇状地形部分については、A-2・4・5・8区の出土遺物等により近世以降の時期に土壇状となったものと考えられ古代寺院に関連する基壇等の遺構とは無関係であることが判明した。また、A-3・7区においては基壇状遺構の盛土下及び最下層である淡茶色粘質土面で一辺1m前後の方形柱穴のプランが確認されており、古代に関する遺構と考えられる。

B区における遺構としては先に述べた金堂の基壇跡と考えられる掘込み地業とこれに伴う版築土が検出されており、B-2～6区において確認されている。B-2区で確認された版築土のラインは基壇跡南辺にあたり、B-5・6区では東辺と北東コーナー部が版築土のラインとして確認されているが、B-3・4区では調査区全面が版築土であり、基壇跡の範囲中に含まれているものと考えられる。また、大師堂南東部のB-1区では掘込み地業及び版築土は確認されていないことから、金堂基壇跡のおおよその範囲は現本堂から大師堂部分までと見られ、大師堂の西までは広がらないものと考えられる。掘込み地業は深さ70cmを測り、厚さ10cm前後の黒褐色粘質土、茶褐色粘質土、暗褐色粘質土等を交互に叩き締めた版築土により形成されており、上部は後世の削崩により平坦化した状態と見られる。これらの調査結果から金堂基壇跡の規模は南北18m×東西30m前後と推定復元することができ、現本堂と大師堂の一部を含む範囲である。基壇跡の規模から見て基壇に建立された金堂は4間×5～7間の規模を持つも

のと考えられる。また、基壇跡はB-2区では古墳時代の堅穴住居跡を掘込み形成され、一方、B-5・6区では平安時代後半と見られる溝跡が基壇跡を掘込んでおり、遺構の切り合いから見ても土佐国分寺跡における金堂基壇跡はほぼ確定したものと考えられる。

C・D・E区における調査では、一部に古代ではないかと考えられた柱穴のプランも確認されているが規模等は不明であり、土佐国分寺跡に関連する遺構としては確認できなかった。出土遺物等から見るとC区の土壇状地形は近世以降の形成と考えられ、D区における塔跡に関しても基壇等の痕跡は確認されなかった。E区においても近世以降の削平や近現代における攪乱等により古代の遺構が存在する可能性は低いものと考えられた。

F区では土塁西裾に沿って溝跡が検出され、土師器細片が出土すること及び土塁に平行することから寺域東限を画する遺構として考えられた。しかし、土塁自体については、地山層上から中近世の陶磁器片が出土していることから中世以降に構築され可能性が高く、さらに現土塁のほとんどが近現代の盛土により形成されたものであることが確認された。

2 遺物

今回の確認調査の各調査区からは古代の瓦、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、青磁、常滑、備前等とともに近世以降の瓦や陶磁器類が出土している。土師器等の土器類は約1,400点であるが土師質土器の細片が多くを占めており、土師器、須恵器等は小量であった。土師質土器は回転糸切りの柱状底部や内面ロクロ目、底部回転糸切りの杯が中心であり、小杯、小皿等も見られた。調査区ではA-1～3区、B-2区において100～300点ほどが出土しており、他の調査区では10～80点と小量であった。古代の瓦は小片も含め1,100点ほどの出土であり、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が見られるが完形に近いものはなく、軒丸及び軒平瓦も断片が数点出土したのみであり、大半は丸瓦及び平瓦の小片であった。以上のような出土遺物のため図化できたものは少なく、図版として掲載した遺物は瓦も含め50点であった。

1～3はA-1区出土であり、1はヘラ切りの土師器皿、2はやや厚みを持つ回転糸切りの土師質土器杯底部、3は輪高台の土師器椀底部である。4～9はA-2区から出土しており、4～7は回転糸切りの土師質土器底部であり、4は厚みを持つ小杯、5・7の内面にはロクロ目が見られる。8は輪高台の土師器杯底部、9は輪高台の須恵器杯底部である。10～15はA-3区出土であり、10・13は輪高台の土師器杯底部、11・12は回転糸切りの土師質土器杯底部であり、12は強く開き内面にロクロ目が見られる。14は輪高台の須恵器杯底部である。15は青磁椀であり見込みに刻花文が見られる。16・17はA-4区出土であり、16は櫛歯波状文の弥生土器壺口縁、17はやや厚みを持つ回転糸切りの土師質土器小杯底部である。18～24はA-6区出土であり、18・19は経塚状遺構から出土した海獣葡萄鏡と常滑甕であり、海獣葡萄鏡は常滑甕底部より出土している。

海獣葡萄鏡は直径13.5cmに復元される小型鏡の約1/3の破片であり、厚さは1.5～2mmである。鏡背の文様構成は内区に伏獣形の鈕を中心に海獣（5獣）と葡萄唐草文を配し、素紋の突圍と外区には葡萄唐草文の間に飛禽（8禽）を表し、外縁帯には雲花文が見られる。鑄上がり不明瞭なことから唐式鏡を踏み返したものである可能性が高く、文様構成等からも奈良時代に鑄造された国産の海獣葡萄鏡と考え

られる。古代に土佐国分寺にもたらされた点については不明であるが、おそらくは伝世された鏡が中世に常滑甕に納められ、埋納されたものであろう。19の常滑甕は口径43.2cm、器高63.2cm、肩部最大径61.6cm、底径19.2cmを測る中型の甕である。口縁はN字状を呈し、張り出した肩部には斜め方向のヘラ描き刻文が見られ、口縁部から肩部にかけては自然釉がかかっている。体部外面にはハケ目を残し、内面には粘土帯接合部に指頭圧痕が見られる。時期的には口縁形状や体部形態から見て13世紀後半から14世紀前半であり、経塚状遺構の形成時期を鎌倉時代末から室町時代前半と位置付ける資料となっている。

20は須恵器杯蓋であり、やや扁平であるが宝珠形つまみを持つ。21は口径20.4cmの壺口縁部、22は底径8.5cmの高台を持つ壺底部であり、ともに須恵器である。23は青磁碗の底部であり、見込みに印花文が見られる。24は備前の播鉢であり、口径は26cmで口縁部は若干肥厚し斜めの端面をなす。内面には7条1単位の播目が見られる。時期的には先の常滑甕と同時期であり、基壇状遺構とその上に造られた経塚状遺構がほぼ同時期に形成されたものであることを示す資料である。25～29はA-8区出土であり、25は土師質土器小杯で柱状の底部、26・27も土師質土器杯底部であり、いずれも回転糸切りである。28は須恵器杯蓋であり、20と同じく宝珠形つまみを持つ。29は須恵器壺の頸部であり、肩部に小つまみが貼付されている。30～32はB-1区出土であり、30・31はヘラ切りの土師器杯底部、32は須恵器杯底部である。33～35はB-2区出土であり、33は弥生土器で小型の碗、34は須恵器杯蓋、35は墜穴住居跡の埋土中出土の須恵器無頸壺であり、ともに古墳時代後半の遺物である。36はB-5区出土の手づくね成形の土師質土器杯、37はC-2区出土の古墳時代の須恵器杯身である。38～41は回転糸切りの土師質土器杯底部であり、38・39はD-1区出土で柱状底部、40はE区出土でやはり柱状底部、41はF区出土である。

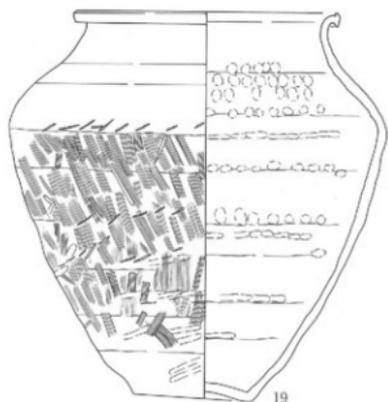
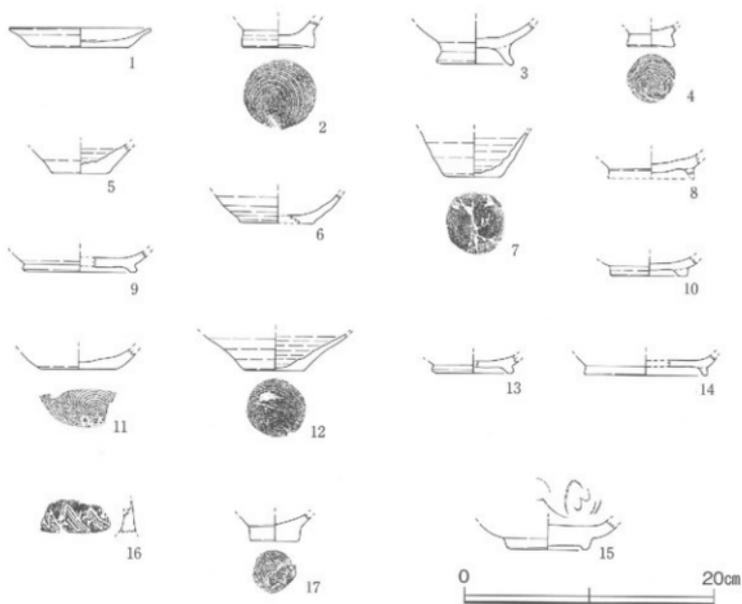
瓦については破片がほとんどであったため図版掲載は42～50の9点である。47の軒平瓦以外は丸瓦2点と平瓦6点であり、42～44・46・49・50は平瓦、45・48は丸瓦である。42は平瓦であり、側面及び端面の一部を残し、凸面に縄目、凹面には布目が見られる。白灰色を呈し焼成は不良である。43も平瓦であり、側面の一部を残し、凸面には斜めの格子叩目、凹面には布目が見られ、白灰色を呈する。44も平瓦であり、端面の一部を残し、凸面には小さな格子叩目、凹面には布目が見られる。淡赤褐色を呈し披熟を受けている。45は丸瓦であり、側面を残し端部には有段の一部が残る。凸面はヘラナデ、凹面は布目が見られる。褐灰色を呈し、焼成は良好である。46は平瓦であり、端面の一部を残す。凸面は太い格子叩目を押しナデ、凹面には布目が見られ、褐灰色を呈する。47は重弧文の軒平瓦であり、瓦当部は幅4cmを測り、長さ15cmが残されている。凸面は横位のハケ調整、凹面は布目であるが、瓦当側5cmほどはヘラ削りが見られる。白灰色を呈し、焼成は良好である。48は丸瓦であり、側面及び端面の一部を残す。凸面は細い横位のハケ調整、凹面には布目が見られる。褐灰色を呈し良く焼き締まっている。凸面には自然釉がかかっている。49は平瓦であり、側面の一部を残す。凸面は縄目であり、凹面には布目が見られる。淡褐灰色を呈し焼成はやや不良である。50も平瓦であり、側面を残す。凸面は46と同じく太い格子叩目の押しナデであり、凹面には布目が見られる。暗灰色を呈している。瓦の厚さは丸瓦、平瓦いずれも2cm前後である。全長、全幅は完形が無いため不明であるが、全長は30cm以上、全幅は平瓦で25cm以上、丸瓦では15cm以上と見られる。

第3表 出土遺物法量表1

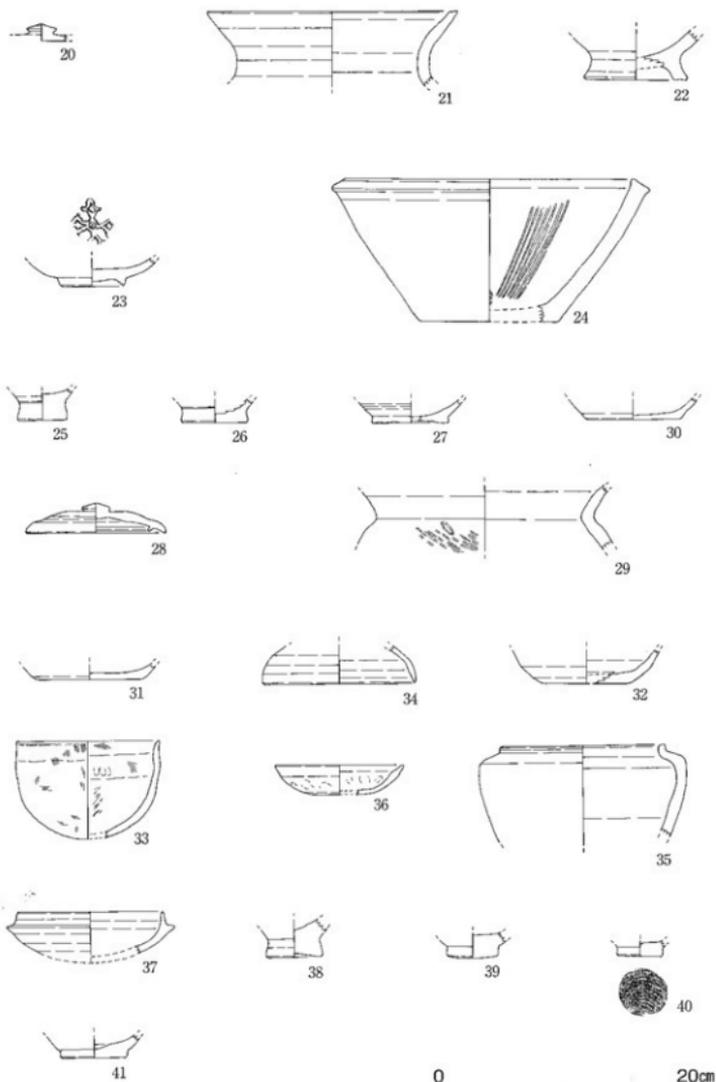
番号	調査区	出土層位	器種	器形	口径	器高	底径	調整・特徴
1	A-1	-	土師器	皿	11.4	(1.6)	8.0	外底面ヘラ切り
2	A-1	Ⅱ	土師質土器	杯	-	(2.3)	-	外底面回転糸切り
3	A-1	-	土師器	碗	-	(4.0)	6.2	貼付輪高台
4	A-2	-	土師質土器	杯	-	(1.8)	3.9	外底面回転糸切り・内面にロクロ目
5	A-2	-	土師質土器	杯	-	(2.5)	4.6	外底面回転糸切り・内面にロクロ目
6	A-2	-	土師質土器	杯	-	(2.5)	6.0	外底面回転糸切り・外面にロクロ目
7	A-2	-	土師質土器	杯	-	(3.7)	4.7	外底面回転糸切り・内面にロクロ目
8	A-2	-	土師器	杯	-	(2.1)	(7.0)	貼付輪高台
9	A-2	-	須恵器	杯	-	(1.8)	9.2	貼付輪高台
10	A-3	-	土師器	杯	-	(1.6)	6.2	貼付輪高台
11	A-3	-	土師質土器	杯	-	(1.7)	6.2	外底面回転糸切り
12	A-3	包含層	土師質土器	杯	-	(3.1)	4.8	外底面回転糸切り・内面にロクロ目
13	A-3	-	土師器	杯	-	(1.6)	6.0	貼付輪高台
14	A-3	-	須恵器	杯	-	(1.7)	10.0	貼付輪高台
15	A-3	包含層	青磁	碗	-	(2.6)	6.6	見込みに刻花文
16	A-4	-	弥生土器	壺	-	-	-	複合口縁部・外面に波状文
17	A-4	-	土師質土器	杯	-	(2.2)	4.0	外底面回転糸切り
18	A-6	-	青銅鏡	海獣葡萄鏡	-	-	-	常滑入妻底部出土
19	A-6	集石上	常滑	甕	43.2	63.2	19.2	集石上出土
20	A-6	-	須恵器	蓋	-	(1.3)	-	宝珠つまみ径2.4cm
21	A-6	-	須恵器	壺	20.4	(6.2)	-	口縁部
22	A-6	-	須恵器	壺	-	(4.2)	8.5	底部・貼付輪高台
23	A-6	-	青磁	碗	-	(2.3)	4.8	見込みに印花文
24	A-6	-	備前	播鉢	26.0	12.3	11.2	スリ目7条1単位
25	A-8	Ⅲ	土師質土器	杯	-	(2.6)	3.8	外底面回転糸切り
26	A-8	Ⅲ	土師質土器	杯	-	(2.0)	5.4	外底面回転糸切り
27	A-8	Ⅱ	土師質土器	杯	-	(2.0)	6.3	外底面回転糸切り
28	A-8	Ⅱ	須恵器	蓋	11.4	2.5	-	宝珠つまみ径2.2cm
29	A-8	Ⅲ	須恵器	壺	-	(5.5)	-	肩部に小つまみ貼付
30	B-1	包含層	土師器	杯	-	(1.7)	7.6	外底面回転ヘラ切り
31	B-1	包含層	土師器	杯	-	(1.3)	8.2	外底面回転ヘラ切り
32	B-1	包含層	須恵器	杯	-	(2.8)	7.2	外底面ヘラ切り
33	B-2	-	弥生土器	小鉢	11.6	8.1	-	丸底・内外面にハケ目残る
34	B-2	Ⅱ	須恵器	蓋	12.2	(3.2)	-	内外面ともにナデ
35	B-2	ST1床産	須恵器	無源壺	13.4	(6.6)	-	肩部に自然縮かかる
36	B-5	Ⅱ	土師質土器	杯	10.4	2.4	4.0	手づくね成形・口縁部ナデ
37	C-2	Ⅱ	須恵器	杯身	11.6	(3.4)	-	口縁に受部あり
38	D-1	Ⅲ	土師質土器	杯	-	(3.1)	4.4	外底面回転糸切り
39	D-1	Ⅱ	土師質土器	杯	-	(1.9)	4.3	底部高台のみ
40	E	-	土師質土器	杯	-	(1.3)	3.7	外底面回転糸切り
41	F	-	土師質土器	杯	-	(1.8)	5.2	外底面回転糸切り

第3表 出土遺物法量表2

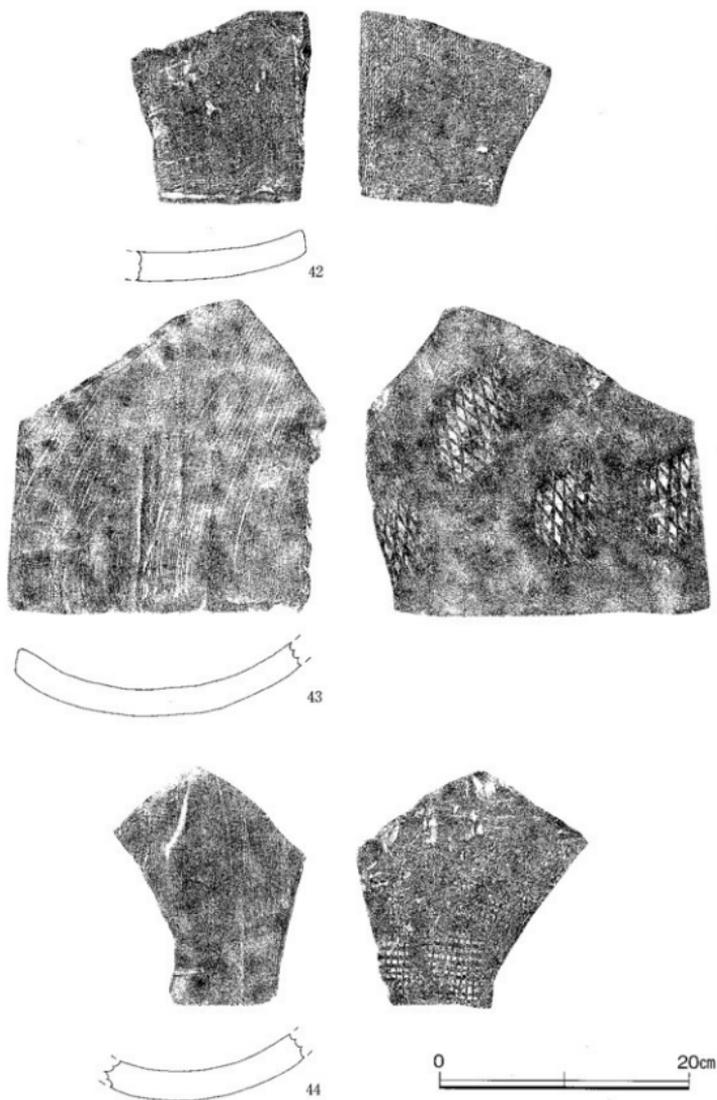
番号	調査区	出土層位	器種	器形	口径	器高	底径	調整・特徴
42	A-1	-	瓦	平瓦	(17.5)	(15.6)	2.4	上面布目・下面縄目
43	A-1	-	瓦	平瓦	(25.5)	(24.0)	(2.2)	上面布目・下面格子叩目
44	A-1	-	瓦	平瓦	(19.5)	(17.5)	(2.2)	上面布目・下面格子叩目
45	A-1	-	瓦	丸瓦	(28.3)	(11.0)	1.6	上面ナゲ・下面布目
46	A-1	-	瓦	平瓦	(31.0)	(15.0)	2.0	上面布目・下面太い格子叩目
47	A-2	-	瓦	軒平瓦	(16.4)	(15.5)	4.0	重弧文
48	A-4	-	瓦	丸瓦	(28.0)	(13.0)	2.0	上面自然輪・下面布目
49	A-4	-	瓦	平瓦	(25.0)	(15.0)	2.9	上面布目・下面縄目
50	B-3	表土	瓦	平瓦	(33.0)	(12.6)	2.2	上面布目・下面太い格子叩目



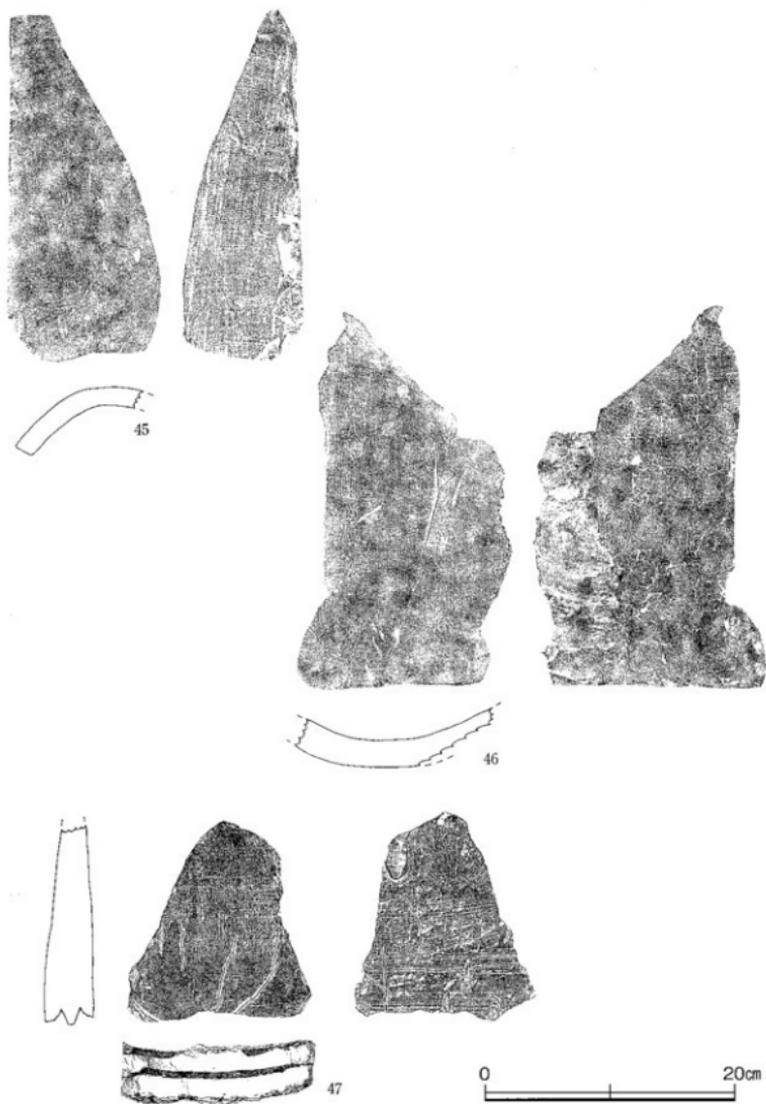
第15图 出土遺物1 (A-1~4・6区出土土器)



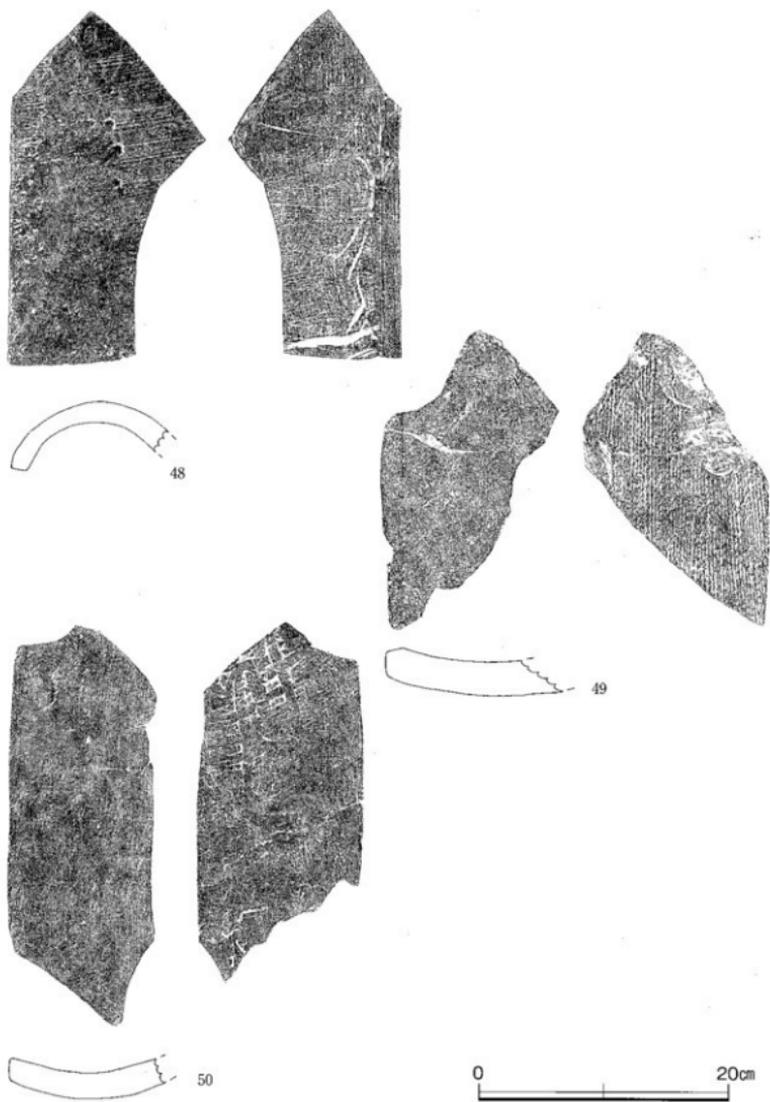
第16图 出土遗物2 (A-6·8、B-1·2·5、C-2、D-1、E、F区出土土器)



第17图 出土遗物3 (A-1区出土瓦)



第18图 出土遺物4 (A-1・2区出土瓦)



第19图 出土遺物5 (A-4、B-3区出土瓦)

V まとめ

今回の第4次調査はこれまでの調査結果も踏まえ、金堂、講堂、塔、回廊等の伽藍を確認するために国分寺境内のA～F区の6ヶ所を対象地として行われた。調査結果として、伽藍配置を決定する明確な遺構は確認されなかったが、先に述べたように金堂基壇跡や中世における基壇状遺構及び経塚状遺構とこれに伴う海獣葡萄鏡、常滑甕等が検出され、土佐国分寺跡の伽藍配置解明と寺院変遷の一端をたどることができたものとする。以下に今次調査結果を踏まえて寺域、伽藍配置等についてまとめてみたい。

1 寺域

土佐国分寺跡の寺域については東から北東部に残る土塁及び南部の土塁状地形を大きな手がかりとして南北450尺、東西500尺と推定復元されてきた。特に東側の土塁は国史跡指定時の根拠となっており、寺域復元の基準とされていたものである。現状では土塁の全長は中央部の出入口で切れるが南北135mを測り、北東角からは西へ60mほど延びている。幅は3～4m、高さ1.5～2mであり土塁内側の裾部は部分的に円礫を数段積んだ石垣となっている。

寺域東限に関しては、東市道の拡張に伴う調査及び第1次調査のT-2区の調査では土塁の東側で寺域を画するような遺構は検出されず、中世の柱穴、井戸等の屋敷跡の存在を示す遺構が確認されており、土塁東側は寺域の範囲外であることが判明している。土塁自体については、今次調査のF区の結果により盛土は中世以降と判断されており、また、土塁の基礎として円礫や版築等による遺構は確認されず、土塁自体を土佐国分寺跡の東限を区画する構築物として積極的に示すものではなかった。さらに、F-2区で検出された溝跡も古代とされ、土塁と並行するところから寺域を画する遺構として考えられたが、出土遺物も少量であり検出長も短く、さらに近年の土塁南部の断ち割り調査では土塁下に中世と考えられる溝が検出されたことから再度検討する必要がある。しかし、土塁を境として東側には中世遺構のみが存在し、土塁の西、国分寺境内からは古代の遺構が検出される状況から見れば、やはり寺域の東限ラインは現況の土塁と同じである可能性が高く、土佐国分寺跡の寺域東限ラインが中世以降も踏襲され、土塁化したものと考えられる。

寺域南限に関しては、現境内の南側ラインが東土塁南端から仁王門へ用水路に沿って南東へ斜めとなっており、近世以降に寺域となったものと考えられる。本来の寺域南限については、惣社南側から参道東側にかけて残されている土塁状地形のラインが寺域の南限として推定されており、推定寺域南北450尺の南限ラインとなっている。平成2年度に行われた便所改修に伴う確認調査は惣社南の土塁状地形部分で行われており、段状地形及び溝跡が検出されている。段状地形は地山を整形し基盤としており、その南北には並行する溝跡が検出されている。これらの遺構は東土塁の方向であるN-16°-Eと直交する方向を持ってことから、現時点では寺域の南限を示すものであり、段状遺構の上端面に柱穴等が検出されていることから板敷等が設けられた土塁状の施設の存在が考えられた。今次調査においても寺域南東部で東土塁南端と南限を示すと考えられる段状遺構を結ぶライン上にE区を設定し調査が進められたが、E区では段状遺構は検出されず、近世以降に削平された状況であり、寺域南限を示す遺構としての延長は不明である。

寺域西限に関する調査としては昭和54年に行われた西市道の拡張に伴う確認調査のみである。調査の結果としては版築状の堆積土及び集石が検出されており、東土塁と類似することから土塁等の基底部ではないかと考えられたが、東土塁自体が中世以降における構築の可能性が強いことから、土佐国分寺跡の西限を示す遺構とするにはさらに検討が必要である。但し現国分寺と市道の間の水田、畑地等には古瓦が散布しており土佐国分寺跡の寺域に含まれる可能性も高いことからすれば、従来どおり西市道部分が推定寺域の西限ラインを示すものと考えておきたい。

寺域北限については、第2・3次の調査結果により、これまで南北500尺で設定されていた北東部の土塁とその延長線上のラインの再検討が必要となった。第2調査のT-7区では土佐国分寺跡の遺構として掘立柱建物跡等が検出されているが、これまでの寺域北限ラインを北へ越えて延びており、第3次調査のT-8区は北限ラインの北側の調査区であるが、掘立柱建物跡が検出されており、寺域が北側へ広がることが判明した。しかしながら北限ライン自体を示す遺構はT-8区においても確認されておらず、現時点では北限ラインを復元するには具体的根拠に欠けている。ただし寺域復元の手がかりとして地形的に見れば、T-8区を含む東西の水田、畑地は帯状の地割りを持ち、北端の畦畔は北側の水田と30~40cmの段差があることから寺域をこの範囲として捉えると、南限ラインから約150mの距離を測り、南北500尺の近似値となる。北部の遺構検出状況及び地形的状況から見て、これまでの推定寺域南北450尺は500尺と考える必要があり、土佐国分寺跡の寺域は東西、南北ともに500尺を測る規模として復元できるのではないかと考えられる。

以上、土佐国分寺跡の東西、南北の寺域について見てきたが、寺域を示す遺構の検出は小規模であり、調査状況を基に推定する中ではあるが、従来の南北450尺を500尺とすることを現時点における一定の結論としておきたい。また、寺域の変遷については、創建時の土佐国分寺が平安時代前半には焼失し、衰退、廃絶した可能性が高く、中世に再び寺院として再成立する段階で東西及び南限は古代における寺域を踏襲し、北限については縮小したものと推測される。また、同時に土塁に関しても同時期に形成され、以後、削平や改修を受けながら現在の姿として残されているものと考えられる。

2 伽藍配置

伽藍配置については、古瓦の散布や塔芯礎の移動前の位置などから東大寺式の伽藍配置とされていたが具体的な資料に欠けていた。しかし、今回の調査では金堂基壇跡の掘込み地業が検出されたことにより、初めて伽藍配置について具体的に検討することができるようになった。

今次調査において金堂基壇跡の掘込み地業が確認されたのは、本堂周辺に設定されたB区であり、B-2~6区における、掘込み地業のラインは金堂基壇跡の南北及び東限として確認されたが、西限は確認することができず、B-1区の結果から見れば大師堂の範囲内に収まるものと考えられる。掘込み地業による基壇跡の規模は南北18m、東西は推定30m前後を測り、建立された金堂の規模は4間×5~7間と考えられる。また、基壇跡の方向はN-16°-Eであり、土塁等と同じ方向を示している。掘込み地業は深さ60~70cmを測り、厚さ10cm前後の暗褐色粘質土等を交互に叩き締めた版築層により構築されており、上面は削平を受けているようである。大師堂は基壇跡の西限にかかっており、その位置は基壇跡と無関係のようであるが、現本堂は金堂基壇跡のやや東に寄るがほぼ中央に位置しており、本堂の基

礎ラインは掘込み地業ラインと平行することから、長宗我部氏による本堂築造に際しては、寺域の中心として意図的に金堂基壇跡に本堂を建築したものと推測される。また、寺域における金堂基壇跡の位置は寺城南限から約54m、寺域東限から約60mを測り、東西、南北各500尺の寺域として金堂基壇跡の配置を見れば、それぞれの中軸線の交点上に基壇が存在しており、金堂を中央に置き、これを基準として伽藍配置と寺域の設定が行われた可能性が考えられる。

金堂以外の伽藍配置については、これまでの調査では具体的資料を得ることができなかったため推測の範囲を超えるものではないが検討されている。まず、僧坊としては、T-7・8区で検出された掘立柱建物跡群が該当するものと考えられる。位置的には金堂跡からやや西に寄るが金堂跡の北約45mに存在しており、柱穴の切り合い、配置等から複数の時期が考えられ、基壇による礎石建物ではなく掘立柱建物で構成されていたものと推定される。講堂に関しても具体的遺構の検出は無く、位置関係から推定すれば金堂北の土壇状地形部分が有力とされるが、A区の調査結果によれば土壇状地形の盛土は古代に関係する基壇跡等ではなく中世以降に形成されたものであり、A-2・4・5・8区においても古代の明確な建物跡として確認できる遺構がないことから、さらに北に位置するT-7区間の水田に存在する可能性も高く、僧坊と同じく掘立柱建物で構成されていたとも考えられる。塔跡についても明確な遺構は検出されず推測の域は越えないが、これまで考察されてきたように、塔芯礎が過去に秋葉社の土台として存在していた歴代住職の墓所は現状地形においても土壇状を呈しており、塔跡として最も可能性が高いと考えられる。また、参道を隔てた西側の開山堂南に位置する土壇状地形については、C区の調査結果により土佐国分寺跡に関連する基壇等の遺構ではなく、近世以降の盛土により形成されたものと考えられた。

回廊及び門については、現在のところ具体的な手がかりが無く不明と言わざるを得ない。東大寺式伽藍配置からすれば金堂に取り付け回廊が南へ延び中門が存在するところであるが、中門の位置と推定される部分では、第2・3次調査のT-4・5区及び参道部の調査により版築土による方形掘方が検出されている。規模は3間×6間を測る東西棟の礎石建物跡と考えられ、金堂跡と同様に東西の中軸線上に位置している。建物跡の配置からすれば中門跡に該当するが、柱穴の配置は中央部の柱間が狭くなっており、その性格は不明であるが、門跡以外の性格を持つ建物跡と考えられる。また、南大門についても南限ラインの中軸線上に存在するものと推定されるが、確認調査が行われおらず現状では不明である。

以上のように伽藍配置についても概観したが、今次調査で確認された金堂基壇跡と考えられる掘込み地業以外については不明な点が多く残されている。金堂北で確認された僧坊跡と考えられた掘立柱建物跡もその位置関係から推定したものであり、講堂、塔、回廊、門等についてもこれまでの推測を越える資料の確認には至らなかったが、配置上、中門の位置において検出された礎石建物跡等の注目される資料もあり、その性格を含め、さらなる調査と検討が必要であろう。

参考文献

- 岡本健児・廣田典夫・宅間一之「土佐国分寺 鐘樓建立・書院改築に伴う発掘調査」1978 国分寺
岡本健児・廣田典夫・宅間一之「土佐国分寺 庫裡改築に伴う発掘調査概報」1979 国分寺
岡本健児「第6 土佐」『新修国分寺の研究』第5巻上南海道 1987 吉川弘文館
宅間一之「土佐国衙ならびに国分寺の考古学的研究」『高知の研究1』地質・考古編 1983 清文堂
出版
山本哲也「土佐国分寺跡の再検討」『海南史学』第32号 1994 高知海南史学会
南国市教育委員会「土佐国分寺跡-第1次発掘調査概報-」1988
南国市教育委員会「土佐国分寺跡-第2次発掘調査概報-」1989
南国市教育委員会「土佐国分寺跡-第3次発掘調査概報-」1991
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡 現状変更等に伴う発掘調査概要報告書第3集」1989
南国市教育委員会「土佐国分寺跡(西側土塁跡)現状変更に伴う発掘調査報告」1979
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡の現状変更(国分寺書庫増築)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要」
1983
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡の現状変更(塀改修)に伴う発掘調査概要」1990
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡の現状変更(便所改築)に伴う発掘調査概要」1990
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡の現状変更(庫裡新築等)に伴う発掘調査概要報告書」1992
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡の現状変更(庫裡増築)に伴う発掘調査概要報告書」2002
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡の現状変更(便所等改修工事)に伴う立会調査概要報告書」2004
南国市教育委員会「史跡土佐国分寺跡発掘調査概要報告書」2005
南国市「南国市史」上巻 1979
高知県「高知県史」考古編 1968

写真図版



1 土佐国分寺跡航空写真



2 土佐国分寺跡遠景（国分川から）



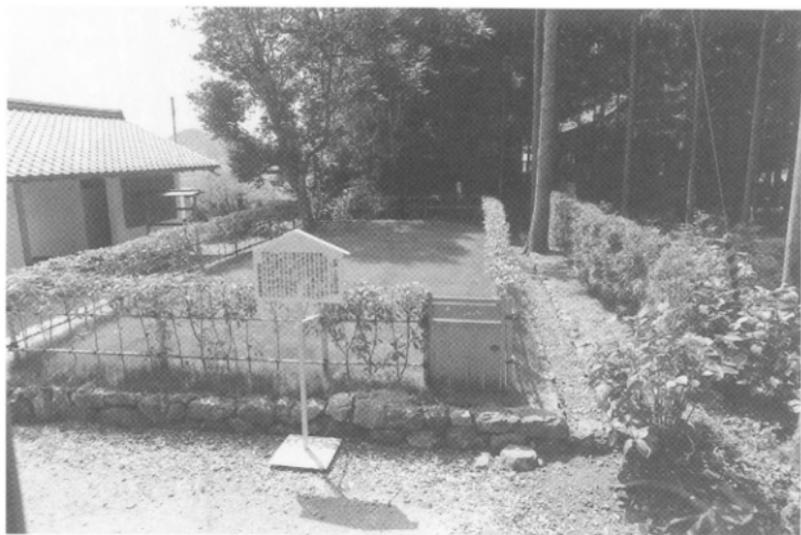
1 土佐国分寺本堂・参道



2 土佐国分寺仁王門



1 土佐国分寺東側土塁



2 土佐国分寺南側土塁跡



1 A区調査対象地 (西から)



2 A-1区 (西から)



1 A-1区集石 (東から)



2 A-1区集石 (北から)



1 A-3区南部(北から)



2 A-3区南部集石(南から)



1 A-3区南部集石(北から)



2 A-3区東部集石(東から)



1 A-3区東部集石(南から)



2 A-4区(西から)



1 A-5区 (南から)



2 A-6区 (南から)



1 A-6区(北から)



2 A-6区集石(西から)



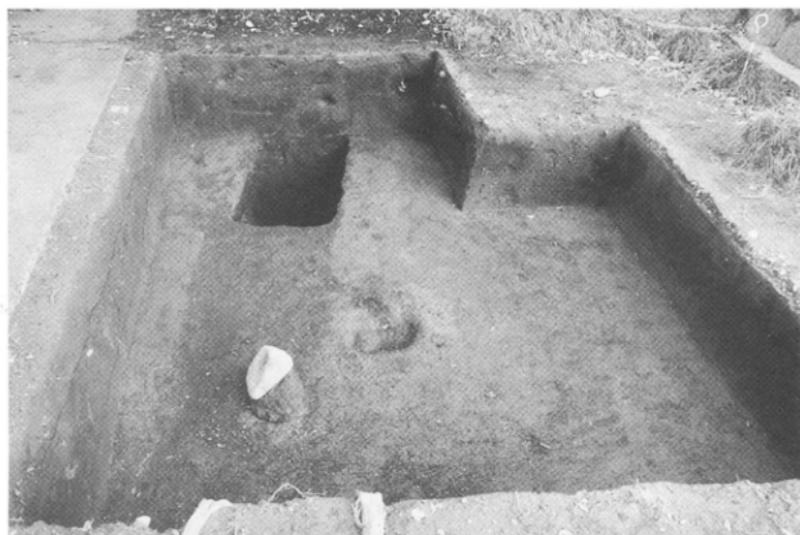
1 A-7区 (東から)



2 A-7区 (北から)



1 B-1区 (東から)



2 B-1区 (南から)